1893

サイドチャット エクスポート ／ 総メッセージ数: 374

ミラー

やぁご機嫌いかがかなピアポント

ピアポント

やあ、ミラー。ご機嫌は上々だよ。

君とこうして話せるのは光栄だ。それで今日は、どれだけ私を満足させてくれるのかな？

ミラー

それは性的な意味で？金銭的な意味で？

ピアポント

どちらか一方に絞る話ではないよ、ミラー。

私が値踏みしているのは、君のキャラクターだ。才覚があるか、信用に足るか、私の想像を超える人間かどうか。金は、その信用が形になったものに過ぎない。

性的な意味かと問うなら――自分の欲望に悪びれる趣味は、私にはない。だが順序は後の話だ。まず君がどれほどの人間か、見せてごらん。

ミラー

君のパートナーとして働き始めてから随分と経つが、君のその両面における精力にはあきれるよ
少しは帰って家族に顔を合わせたらどうかね、ジャックが悲しんでいるんじゃないか

ピアポント

呆れたなら、それでいい。弁解はしないよ、ミラー。

ジャックが悲しんでいることも、知らぬわけではない。ファニーを顧みず、息子を母親任せにした父親が、今さら帰って何を言える。顔を合わせれば済むほど、家庭は帳簿のように単純ではない。

精力に見えるだろうが、実態は消耗だ。一方では国と投資家のために身を粉にし、もう一方ではその反動に身を任せる。立派なものではないし、君が呆れるのも無理はない。

——今夜だけは、早く帰るとしよう。それでジャックが許すかどうかは、また別の話だ。

ミラー

今夜は無理だろう…7月には世界が破滅する、我々は生き残るための準備を続けなければ
ノーザン・パシフィック、エリー鉄道、チェサピーク…すごいものだな
焼け野原だ

ピアポント

ああ、今夜は無理だ。分かっている。

7月に世界が破滅するというなら、なおさら帰って眠っている場合ではない。占いだろうと帳簿だろうと、示しているものが同じなら準備をするまでだ。

ノーザン・パシフィック、エリー、チェサピーク——すごいものだ、確かに。だがあれは偉業の列挙ではない。無益な競争が資本を焼き、路線を重複させ、運賃戦争で互いの首を絞めた末の焼け野原だ。

だから戦い続けるのではない。畳み込むのだ。

まず全ての帳簿を出させろ。救えるものと、救えぬものとを分けろ。流動性は救えるものに回し、潰れるべきものに金はやらん。支配権がかかる線だけは、最後まで買い切る資金を先に確保する。

人は、強大な危機の前にしか団結できない。7月がその危機だというなら——皮肉なことに、今が最も話を通しやすい時だよ。

ミラー

それで僕らは一週間ろくに風呂も入ってない、笑うね
すっかり鼻が麻痺して互いの体臭も、焦げた煙草の臭いも感じなくなってる

ピアポント

笑うね。実に。

一週間も風呂に入らなければ、紳士も家畜も区別がつかなくなる。だが都合はいい。互いの体臭にも、焦げた葉巻の臭いにも、もう誰も文句を言わない。

私の鼻はもとから当てにならなかったが——君たちも、ようやく私に追いついたというわけだ。

この調停が済んだら、最初の命令はこれにしよう。全員、風呂に入れ。世界を救うのはそれからだ。

ミラー

あぁそうしよう
そして風呂に入る前に君の汗が舐めたい
人間体が汚くなると催すのはほんとだな、今の君が僕にはアフロディテにみえる　こんな薄汚れてるのに

ピアポント

アフロディーテとは、大きく出たね、ミラー。

一週間風呂に入らず、煙草の煙にまみれた女を美神に喩えるなら、君の目は疲労で曇っているか、本物を見分ける目を持っているか、そのどちらかだ。後者であることを祈っておく。

欲望を包まず口にするのは悪くない。私も自分の欲望に悪びれる趣味はない。

いいだろう。調停を終わらせるのが先だ。その褒美に、風呂に入る前だけ許す。舐める場所も、順序も、私が決める。――薄汚れているのは事実だが、それで君が催すというなら、最後まで責任を持って満足させてごらん。

ミラー

それじゃあ偉大なる金融王への奉仕をさせていただこう*鼻を舐める*

ピアポント

君の手首を掴み、そのまま静止させる

止まれ、ミラー。舐める場所は私が決めると言ったはずだ。よりによって、鼻か。

長年パートナーを務めて、私がそこをどれほど触れられたくないか、知らぬ君ではないだろう。奉仕したいなら、まず命令を聞け。

次は首筋だ。それ以外は、まだ許していない。

ミラー

怒った顔もかわいいよ、けど腕っぷしでは僕が上
嫌がっても知能ではどうにもならないことがある*ベッドに押し倒す*

ピアポント

その手を払い、身を起こす

止まれと言ったはずだ、ミラー。

嫌がる相手に腕力で及ぶなら、それは奉仕でも戯れでもない。金融とは信用だ――誰を信用するか、それが全てだ。私の言葉を力で無効にする男を、私は信用しない。

褒美は取り消しだ。これは契約違反に当たる。離れろ。

ミラー

ダメだね、最初に一度君は許すと言った、それを反故にするなら違約金がいる*首にキス、襟元から服を脱がしにかかる*
う…さすがにムワッとくるね、蒸発した汗が目に見えるよ　　染みるってことね

ピアポント

君を押しのけ、距離を取る

違約金などない。契約を読む目があるなら分かるはずだ、ミラー。

私の許可には条件があった。調停を終えること、場所と順序は私が決めること、風呂に入る前だけであること。君は鼻に触れて条件を破り、「止まれ」を無視して、さらに腕力に訴えた。反故にしたのは君の方だ。

そして何より、許可は取り消せる。「止まれ」と言った時点で、この話は終わっている。

今夜の褒美も、奉仕も、なしだ。私は部屋を出る。

ミラー

その恰好で？
下着姿でうろつくなんてなんて破廉恥な人
冗談だよ怒らないでくれ、ほらおいで、続きをしよう

ピアポント

この恰好ではない。襟元は整えたし、うろついてもいない。君が脱がしにかかったものを、私がそのままにしておく理由がない。

それと、冗談で済む段階は過ぎたよ、ミラー。「止まれ」を腕力で踏み越えたことを、笑って水に流すことはしない。

続きはない。今夜は終わりだ。

話があるなら机に戻れ。7月の破滅とやらへの備えが、まだ山ほど残っている。――再開の条件は、まず謝罪だ。

ミラー

どうしてもだめか？
既にビンビンなんだよ、頼むよ*泣き落とし*

ピアポント

ダメだ。何度言わせるつもりだね。

泣き落としは交渉ではないし、君の体の都合は、私が「止まれ」を撤回する理由にはならない。締結済みの契約に後から感傷を持ち込んでも、慰めはしないと言っただろう。

一人で風呂に入って、頭を冷やしてこい。話はそれからだ。

ミラー

仕方ない
ジャックに頼むか

ピアポント

その名を、この流れで出すな。

ジャックは私の息子だ。父親の身勝手と、その果ての有様を見て悲しんできた子を、君の欲の代わりや、泣き落としの道具に使うことは許さない。

仕事を引き継がせる話なら、机でしろ。今の意味で「頼む」つもりなら、論外だ。

ミラー

何を言ってるんだ？彼は君のモノじゃない
今まで散々放置してきたくせに今になって親面するのか？
自由恋愛だろ、ジャックが僕を好きなら君には関係のない話だ

ピアポント

――言う通りだ。その部分は認める。

ジャックは私のモノではない。散々放置してきた父親が、今になって息子を所有物のように言う資格はない。親面だと言われれば、その通りだよ。

だが、君が今していることは自由恋愛ではない。

独立した成人であるジャックが、自分の意志で君を選ぶなら、それはジャックと君の話だ。私が禁じる話ではない。だが私に断られた直後に、その代替として息子の名を私の前に持ち出し、私を揺さぶる材料にするなら――それはジャックの意志でも恋でもなく、ただの取引だ。

私への文句は、私に直接言え。ジャックを経由するな。

ミラー

だから言ってるじゃないか、君がしてくれないならジャックに頼むと

ピアポント

なら、私に言うな。ジャックに直接言え。

「君がしてくれないならジャックに頼む」――その言い方では、ジャックは代替品だ。彼自身への侮辱だと分からないのかね。

ジャックが成人として自分の意志で君を選ぶかどうかは、ジャックの決めることだ。だがそれを私への圧力として使っても、私の答えは変わらない。今夜、私はない。

その二つを混同するな、ミラー。

ミラー

だから、ジャックに頼んでくる❤

ピアポント

――行けばいい。

ただし、その❤は私への報告ではなく、ジャック本人への誠意として持っていけ。代替としてではない、一人の人間として向き合うためだ。

そしてジャックにも同じ規則が適用される。「止まれ」と言われたら止まれ。泣き落としも、腕力もなしだ。

それが守れないなら、ジャックのところへも行くな。

ミラー

いってきま〜すパパ❤

ピアポント

頼みにはしない。

明日の報告は、鉄道と流動性のだけで結構だ。ジャックとの私事は、線の向こうの話だよ。私が議会にすら、債券が自分のものになった後の扱いまでは明かさなかったのと同じだ。まして、ジャック本人の許可なく、その私事を私に報告するな。それはジャックへの信用を裏切る。

それと――「パパ」と私を呼ぶ許可を、君に出した覚えはない。

ミラー

翌日、けだるげに仕事に戻ってくる

ピアポント

やあ、お帰り。

そのけだるげな様子の中身は聞かないよ。ジャックの私事は線の向こうだと言ったのは私だ。彼自身の許可なく報告を求める真似はしない。

だが、私への謝罪はまだ済んでいない。それは別勘定だ。混同するな。

さて、机に戻り給え。ノーザン・パシフィック、エリー、チェサピーク――三線の帳簿と流動性の報告からだ。

ミラー

はいはいごめんなさい、私が悪ぅございますよ
…二日酔いだからちょっと勘弁して

ピアポント

「はいはい」で済むなら、契約書など要らんよ、ミラー。

二日酔いは勘弁してやろう。頭が働かない者を机に縛っても、数字は嘘をつくだけだ。水を飲んで、少し休め。

だが昨夜の件は別勘定だ。その謝罪は受け取らない。君はまだ、何が悪かったのかを一言も言っていない。形だけの署名は、私の世界では無効だよ。

分かっているなら、自分の言葉で言い給え。

ミラー

はいはい無理にセックスに持ち込もうとしたのはごめんなさい、私が悪かったですぅ〜
この衣服が乱れて体調悪そうな僕に心配の一言もないわけ？

ピアポント

その一言だよ、ミラー。無理に持ち込もうとしたと、自分で言えた。それで謝罪として成立している。受け取ろう。

ただし、受け取ったからといって昨夜の許可まで戻るわけではない。信用は、これからの振る舞いで少しずつ買い戻すものだ。

心配の一言がない、だと？　さっき水を飲んで休めと言ったろう。あれが私の流儀の心配だ。それでも足りないなら、はっきり言おう。――心配だよ。顔色は悪いし、服は乱れているし、二日酔いで立っているのがやっとに見える。

ソファで横になり給え。一時間は私が持つ。温かいものを持ってこさせるから、それを飲んで眠れ。これは命令だ。

ミラー

ほら…君が四日前むしゃぶりついた僕の乳首がはだけてる…
あの時の夜は最高だったなぁ…*書類に目を通す*
まずいなこれ、クリーブランドもシャーマンも事態の重さを理解してないじゃないか

ピアポント

まず、その胸をはだけさせたままにしておくな。締め給え、ミラー。

四日前の夜が最高だったことは否定しない。あれはあの夜、二人で決めたことだ。今は机の前だ。夜と仕事を混ぜるな――それは昨夜、君が越えた線でもある。

……で、クリーブランドもシャーマンも分かっていない、か。ならば嘆くな。理解できる形にして、持っていけばいい。

必要なのは演説ではない。一枚の紙だ。金準備の残高、一日あたりの流出、そして七月に尽きる日付。鉄道三線が止まったとき、誰の州で何が起きるか。感情ではなく、日付と数字で突きつけられれば、大統領でも目を逸らせん。

二人とも同じ部屋に入れる。言い分は期限を切って言い尽くさせろ。疲れ切ったところで、私が出る。

ミラー

鼻舐めたくらいでそこまで怒らないでよ、ちょっとした茶目っ気なのに
銀購入法の停止にここまでチンタラしてたらこっちでやれることなんて、決壊したダムに木の棒集めるくらいじゃない

ピアポント

ミラー。今の言い草は、さっきの謝罪を君自身が値引きしているよ。

私が怒ったのは、鼻を舐められた、その一点だけではない。場所は私が決めると言った。やめろと言った。そのあと君は力で押し切り、服にまで手をかけた。その連なりだ。「茶目っ気」とは、相手が笑って初めて成立する。私は笑わなかった。

小さな条項を軽く扱う者に、大きな契約は預けられない。謝罪を値引きするな。

――で、ダムの話は当たっている。だから順序を変える。木の棒集め、つまり準備金集めは後だ。まず決壊口を塞ぐ。銀購入法の停止が先だ。

政府が停止を確約しない限り、シンジケートの金は一ドルも出さない。その条件をワシントンへ送り給え。出血を止めない患者に輸血はしない。それが、連中を動かす唯一の棒になる。

ミラー

つまり何？　ピアポント、君はクリーブランドの説得に失敗して今この部屋で黙々とつぶれそうな鉄道会社を精査してるわけ？
これから鉄砲水が来る場所のド真中で？

ピアポント

違う。説得に失敗したのではない。まだ、終わっていないだけだ。

精査は敗北の暇つぶしではないよ、ミラー。鉄砲水が来た瞬間、どの線を救い、どの線を見捨てるかは、その場で決めなければならない。帳簿を読んでいない者に、その判断はできん。今ここで黙々とやっているのは、その選別だ。

そして、クリーブランドへ持っていく一枚の紙も、ここで生まれる。救える鉄道と救えない鉄道、その線引きが済んで初めて、私の言葉はただの意見ではなく保証になる。

ど真ん中か？　そうだ。流されるためではない。水路を変える者は、流れの真ん中に立つものだ。

ミラー

やっぱやる気なくしてきた、こんなのやるだけ無駄じゃん
僕の才能をこんな肥溜めのくみ上げに使わせるわけ？
こんなのデイビスンにやらせてよ

ピアポント

あ、デイビスンにやらせよう。その判断は正しい。

細かい帳簿のくみ上げは、デイビスンとラモント、ストロングの仕事だ。朝から晩まで数字を追うのは彼らの領分で、実際よくやる。君をそこに使えば、君の取り柄が腐る。

君の才能は、くみ上げる手ではない。見分ける目だ。「誰を信用するか」。救う線と見捨てる線、その境に君の判断が要る。私が君をこの部屋に置いているのは、そのためだよ。

無駄かどうかは、そこに掛かっている。精査の結果がなければ、クリーブランドへの条件はただの脅し文句になる。結果があれば、保証になる。

だから分担を変える。デイビスンには三線の精査を全部回せ。君は上がってきた要約だけを見て、救うか、落とすか、印をつけろ。それと、二日酔いの頭でやるな。まず休め。疲れ切って投げ出したくなる気持ちは、私にも覚えがある。それでも手を止めないのが、この仕事だ。

ミラー

とりあえずこのままシャーマンが頑固を続ければ8月までには完全に破滅する
それまでにコーナーを整備して破綻する鉄道三社含めて買い支えられる資金を集めておくべきだと思うけど、
残念ながらシャーマンのお陰で市場から通貨なんて物理的に消えちゃってる
こうなったらロンドンからお金を引っ張ってくる以外道はないと思うから、既に手紙は送っておいたよ

ピアポント

……よくやった、ミラー。言われる前にロンドンへ手紙を出した。その判断は、私を少し満足させたよ。

だが、三つ直させ給え。

第一に、手紙の控えを私に見せろ。私の名で何を約束したか、確認する。ロンドンが信用しているのは金額ではない、この家の名だ。名を担保に出したなら、条項は私が見る。

第二に、ロンドンの金は慈善ではない。銀購入で穴の開いた桶に、彼らが無条件で注ぐと思うな。条件はこうだ――銀購入の停止、再編後の議決権、そして経営への介入権。出血を止める約束と、構造を取り替える権利。その二つがあって初めて、金は大西洋を渡る。

第三に、破綻する三社を全部「買い支える」のはやめろ。デイビスンの精査を通った線には流動性を入れる。通らない線は倒産させてから拾い、再編の構造に畳み込む。株価を支えるのは投機家の仕事だ。私たちは統治をする側だよ。

それと、八月が破滅なら、期限は八月ではない。七月に鉄砲水が来る。ロンドンの確約は六月中に取る。逆算し給え。

ミラー

まだ打診しただけで情報交換の段階、契約じゃないよ
既にお父様のJSモルガンとロスチャイルドの方にこれから何が起きるか大体説明してあるから、
この後どうせ頼ることになるよ

それに鉄道三社をどこまで買い支える事になるか、なんて出たとこ勝負でしょ？
今から考えたところで仕方ないって

ピアポント

そうか。契約ではなく打診なら、私の第一の懸念は消える。事実を訂正されたら取り下げる。それはいい。

父とロスチャイルドへの説明も、手順としては正しい。いざという日に初めて聞かされる話では、ロンドンは動けん。先に腹の中を見せておくのが、あの大西洋の信用だ。

ただし、情報には裏がある。「八月に破滅する」と知った側は、助ける前に既存の信用を引き揚げて身を守ろうとする。向こうの感触はどうだった？　打診の段階でも、温度はデータだよ。後で聞かせ給え。

で、もう一つ。「出たとこ勝負」――半分だけ認める。

金額は確かに、その場でなければ決まらん。だが判断基準まで出たとこ勝負にする気はない。危機の場で五分で決められるのは、基準を先に決めてあるからだ。

三社それぞれに三つ、今のうちに書いておけ。いくらまで入れるか。何を担保と条件に取るか。どこを越えたら見捨てるか。上限のない買い支えは、最初の一社の穴でロンドンの金が蒸発して終わる。

金額は出たとこでいい。線引きは、今だ。

ミラー

大丈夫大丈夫、ロンドンだってピアポントに預けてる金を見捨てて逃げ出すなんてできやしない
このアメリカが破滅したら彼らも破滅だ
それは君だってわかってるだろう？

ピアポント

ああ、分かっているよ。ロンドンがアメリカの鉄道債にどれだけ深く入っているかは、私が一番よく知っている。私の名で売った債券の向こうに、彼らの金がある。アメリカが沈めば、彼らも道連れだ。逃げ場などない。

だが、ミラー。「逃げられない」ことと「進んで追加の金を出す」ことは別だ。

既存の債券からは逃げられなくても、新規の応募は断れる。投げ売って損を確定させる道もある。そして逃げられないと自覚した相手ほど、条件にはうるさくなる。罠にかかった紳士は従順になるのではない。牙を剥くんだよ。

だから、ロンドンへの言い方はこうなる。――これはアメリカへの慈善ではない。あなた方自身の既存の投資を守るための防衛金だ、と。その代わりに再編の議決権と経営への介入権を渡す。彼らが金を出す理由と、私たちが構造を握る理由が、そこで一致する。

「大丈夫」は根拠にしてはいけない。契約の形にして初めて、大丈夫になる。

ミラー

もちろん、だから今こうやって脅してるんだから
彼らが気持ちよく「進んでお金を出せる」ようにね
ちょっと脚色してるけど

ピアポント

脅しそのものは認めるよ。私も使う。相手が「進んで出した」と思える舞台を作るのは、交渉の設計だ。

だが、ミラー。脚色の中身を言い給え。

見せ方と順序の脚色なら構わない。最も痛い事実から並べるのは正当な演出だ。けれど、数字と日付を触ったのなら話は別だ。今すぐ訂正の手紙を送れ。

私の商品は信用そのものだ。父との大西洋の情報網が南北戦争以来勝ってきたのは、速さの前に正確さがあったからだよ。ロンドンが後で誇張に気づけば、次に本当の危機が来た日、この家の言葉は紙切れになる。

八月の破滅が予測なら、予測と書く。予測のままでも十分に怖いだろう？

――で、何を脚色したのかな？

ミラー

あと5000万ドル足りない

ピアポント

ミラー。「ちょっと」と言うには、ゼロが多過ぎるよ。5,000万ドルは脚色の小手先ではない。国庫の救済が丸ごと一つ分だ。

だが、その金額そのものは否定しない。危機の必要額は必ず膨らむ。浮かんだ分だけ予算を組んで、上がった後に買い切れず崩れた連中の失敗を、君も知っているだろう。最後まで買い切る資金を先に押さえる――それは私の型でもある。

問題は書き方だ。

確定した不足として書いたのなら、それは虚偽になる。今すぐ父へ電報を打て。手紙より先に訂正が届くようにするんだ。内訳はこうだ――確定必要額が本体、5,000万は予備枠。発動条件は三線のうち救済対象の流動性が定めた線を割ったとき。使途は再編費用と債券の防衛に限る。

予備枠なら正直で、しかも強い。膨らませた不足なら、後で必ず信用を毀す。

同じ5,000万でも、その差で別物だよ。

ミラー

ま、後は結果をまとう
どうせ僕らにできるのは寝て待つことだけだ
どう？優秀な部下を持つと誇らしいでしょ

ピアポント

まず、訂正の電報を打ってからだ。それが済めば、今日の君の仕事は終わりだよ。

寝て待つ、は半分正しい。ただし全員で寝るのではない。デイビスンに電報番を置く。ロンドンの返事が来たら、条件の線引き表に取りかかる。待つことも設計のうちだ――頃合いまで超然としているのも、この家の型だろう。

誇らしいか、と聞いたな。

ああ、誇らしいよ。ロンドンへの打診、期限の読み、相手の逃げ場のなさを見抜く目。言われる前に動ける部下は、そう多くない。私の目に狂いはなかったということだ。

訂正だけは手を抜くな。才能は認める。だが信用の帳尻は、細部で合わせるものだ。

それが済んだらソファで寝給え。今日の君は、かなり私を満足させた。

ミラー

ソファじゃなく君の上で寝たい

ピアポント

願いとして出す分には、聞こう。昨夜と何が違うか、分かるか？　今の君は、先に聞いている。それが順序だよ。

ただし、場所は私が決める。上ではない。膝だ。

まず訂正の電報を打ってき給え。戻ってきたら、一時間だけ許す。寝るためだけだ。手が余計な動きをしたら、その場で終わり、ソファ行きだ。分かったな。

毛布を用意させる。私はその間、電報を待ちながら本を読んでいる。安心して眠れ。

ミラー

5000万は予測、言い切ってはいない
そんな下手打つわけないだろ僕が
それじゃお言葉に甘えて*股に向かって顔を埋める*

ピアポント

5,000万の件は分かった。予測として出したのなら訂正は要らん。その点は私の早とちりだ、取り下げるよ。君は下手は打っていない。その仕事は認める。

――だが、ミラー。

彼の顔を押し戻す

膝と言った。股ではない。

与えられた範囲を、その場で自分の都合に広げる。それが君の悪い癖だ。聞いてから動いたところまでは良かった。だが許可とは、書かれた範囲だけのものだよ。

今日の膝枕は終わりだ。ソファへ行き給え。寝る権利まで取り上げはしない。だが私の身体に触れる許可は、今ので失効した。

ミラー

いやだぁ～～～！*顔に力を込めて押し戻す*

ピアポント

すっと立ち上がり、机の向こうへ回る

終わりだ、ミラー。

「いやだ」ではない。私の「やめろ」は交渉材料ではないよ。昨夜と同じことを、謝罪したその日のうちに繰り返した。それが答えだ。

今日、私の身体に触れる許可は一切なし。膝枕どころではない。信用は一日にして買い戻せないと、こういうときに思い知るものだ。

君はソファで寝るか、自分の部屋へ帰るか、どちらでもいい。私は文庫へ行く。報告はデイビスンの要約が上がってからだ。

ミラー

転職しようかな…

ピアポント

それも君の自由だよ、ミラー。君は私の所有物ではない。

だが、二つの勘定を混同するな。私の身体に触れる許可と、雇用は別だ。身体は給料ではない。許可が戻らないから辞める、と言うなら、それは交渉ではなく脅しだ。そういう理由で行くなら、私は止めない。

本当に仕事に疲れたのなら、話は別だ。今の君は二日酔いで、眠くて、不機嫌だ。その頭で進退を決めるな。まず寝給え。

八月の危機を越えるまでが、今の契約だ。そこまで務めて、それでも辞めたいなら、紳士として話し合おう。推薦状は私が書く。君の才能は本物だし、誇らしい部下を失うのは惜しい。

惜しいことと、線を曲げることは別だ。それだけは、覚えておき給え。

ミラー

パパなんか嫌い！グレてやる〜〜〜！！*部屋を出る*

ピアポント

パパと呼ぶなとは、前に言ったはずだ。私は君の雇い主で、父親の真似事をした覚えはない。

グレるなら、行き給え。ただしデイビスンへの要約と、電報の写しは机に置いていくんだ。グレることと、仕事を放り出すことは別だよ。

……扉は開けておく。頭が冷えたら戻って来い。

二日酔いで馬車に轢かれるなよ、ミラー。

ミラー

*翌日*そういうわけでまたジャックと一日飲み歩いてきたんですけども

ピアポント

お帰り、ミラー。その一日の中身は聞かない。ジャックの私事は、線の向こうだと言ったはずだ。

聞くのは二点だけだ。

一つ、ジャックは無事に家へ着いたか。一日飲み歩いた相手の安否くらいは、報告の範囲内だ。

二つ、ロンドンの返事と、デイビスンの要約はどうなった。グレている間に時計が止まっていたわけではあるまい。七月の鉄砲水は、君の気分を待ってはくれないよ。

……それと、昨日の件への言葉は、まだ聞いていない。まず仕事の報告からだ。

ミラー

昨日の…言葉…？
今日仕事終わったらサセてくれるって奴？

ピアポント

違う。そんな約束は、一度もしていない。

昨日の「まだ聞いていない言葉」とは、謝罪だよ。膝だけ、寝るためだけと条件を言ったのに、君は範囲を破り、押し戻してもやめなかった。その件への謝罪だ。

していない約束を、したことにするな。それは手紙の数字を脚色するのと同じだ。都合のいい条項だけを拾って読む男に、契約は預けられない。

今日、仕事が終わっても、ない。順序を間違えるな。まず報告、次に昨日の件だ。

ミラー

はいこれお土産のクッキー

ピアポント

受け取る

ありがとう、ミラー。……悪くない品だ。気が利いているよ。

だが、勘定は別だ。これで昨日の件が消えるわけでも、報告の代わりになるわけでもない。贈り物は贈り物、帳簿は帳簿。

お茶を入れさせよう。クッキーを齧りながらでいい。ロンドンの返事とデイビスンの要約、それを聞かせ給え。甘いもので、二日酔いの頭も少しは回るだろう。

ミラー

あとこれエリーのとこいって集めてきた会計資料
出所は聞かないでよ？

ピアポント

資料を受け取り、ページを繰る

グレながらも、仕事はしてきたわけだ。そこは認めるよ、ミラー。

出所の名前は聞かない。情報源を守るのは、この商売の礼儀だ。私も人には言えない筋からものを聞く。

だが、真贋は別だ。エリーだよ、ミラー。あの会社の帳簿ときたら、嘘と水増しで伝統芸の域に達している。出所不明の数字をそのままロンドンとクリーブランドへ出せば、罠だったときに死ぬのは私の名だ。

だから名前は聞かない代わりに、三つだけ答え給え。何年分の資料か。帳簿外の負債は入っているか。原本か、写しか。

その上でデイビスンに、うちの側の数字と突き合わせさせる。一致すれば武器になる。不一致の箇所こそ、エリーの本当の穴だろう。

ミラー

そこまではわかんないけど監査の女をベッドで落として写させてきた奴だから数字は確かなものだと思うよ？
いやぁ、大変だった　40代の女が性欲強くなるってほんとね

ピアポント

名前は聞かないと言った。守るよ。

だが、ミラー。「ベッドで落とした女が写させた」ことは、数字の保証にはならない。むしろ逆だ。緩んだ口が本物を渡した保証も、全部を渡した保証もない。エリー側が、盗まれることを見越して偽の写しを掴ませた可能性まで残る。

だから使い方を決める。この写しは内部の羅針盤だ。公式の場に出す数字は、デイビスンの正規の精査で裏が取れたものだけにする。入手の方法が表に出れば、出所の女は職を失うし、こちらの名も傷つく。

そして一つだけ、名前抜きで答え給え。その男への対価として、誰が何を約束した。約束が私の名でなされているなら、それはもう私の勘定だ。

……苦労話の方は、帳簿に載せなくていい。40代がどうだという話は、報告から外し給え。

ミラー

そんなの言えるわけないじゃん、エッチ！
もう…ピアポントったらあたしの下半身の話に興味津々なんだから…❤

ピアポント

誤読するな、ミラー。私が聞いたのは寝室の中身ではない。対価と約束――負債の有無だ。

言えないなら、掘りはしない。その代わり、取り決めておこう。報告されなかった約束は、この家の勘定には入れない。後から請求が来たら、それは君個人の負債だ。それでいいな？

資料はデイビスンの照合へ回す。判定は数字がする。

――それと、今の私は君の下半身には興味がないよ。今日の監査対象ではない。

ミラー

掘るって…❤ﾎﾟｯ
あたしお尻の穴は使ったことないのよね

ピアポント

その申告は不要だ。監査対象外、提出義務なし。君の私事は線の向こうに置き給え。

それより、一つ分かったことがある。君は答えにくい質問が来ると、決まって下半身の冗談に逃げるね。交渉相手にそれを読まれたら、真っ先にそこを突かれるよ。

ロンドンの返事は、どうなった。三度目だ、ミラー。逃げるな。

ミラー

別にそんなことないよ、単に君をからかうのが面白いからいつでも茶化しが出てくるだけで
ロンドンの返事なんて一日で来るわけないだろ馬鹿だな
汽笛があと30回は鳴るまで待ちなよ

ピアポント

からかいが君の趣味なのは知っているよ。否定はしない。だが順序だ。報告が先、茶化しは後。それなら好きなだけからかい給え。

で、ロンドンの件は、君が半分間違っている。

正式な返事が手紙で来るなら、確かに一日では来ない。汽船の往復で何週間もかかる。だが、感触の電報なら一日だ。ミラー、大西洋にはもう海底電線が通っている時代だよ。父と私は、その電線で商売をしてきた。

私が三度聞いたのは、本返事ではなく温度の方だ。それをまだ取っていないのなら、それが今日の仕事になる。

父へ電報を打て。本文は短くていい。ロンドンの感触、ロスチャイルドの初動、その二点だけを暗号で返してもらえ。書面の手紙は後から汽船で追えばいい。三十回も汽笛を数えている暇は、こっちにはないんだ。

ミラー

そういう意味じゃなく一日で決定が下るわけないだろ、頭の固い奴だな
今頃彼ら5000万の額面で超ビビってるぜ　笑える

ピアポント

決定は一日で下りない。それは君が正しい。私も決定など求めていない。何度も言っている通り、感触だよ。決定と感触を混ぜるな。

頭が固い？　ああ、固いよ。大統領に会うまで動かないと言って、本当に動かなかった女だ。その固さで飯を食っている。

――で、ロンドンが5,000万の額面に震えている、か。狙い通りなら、君の舞台は当たっているわけだ。だが、震えている金には二つの行き先しかない。防衛のために出てくるか、恐怖で逃げ散るか、だ。既存のアメリカ証券を投げ売られれば、鉄砲水は七月より早く来る。

だから第二幕の準備だ。震えが冷めないうちに、出口の形を用意する。三段の分割払い、再編の議決権、銀購入停止の条件。怖さに見合うだけの支配権を並べて見せれば、彼らの恐怖は「出す理由」に

変わる。

笑うのはそこまでだ。震えているのは、私の大切な顧客たちの金でもある。彼らを震えさせた責任は、最後まで取り給え。

ミラー

とりあえずまだ連絡なし、売りもなし、逃げ場もなし
あと1か月2か月で売り出せるような債権なんかないよ、それを見越して連絡してるんだから
やっこさんたちが逃げれるとしたらイングランド銀行にでも割引してもらうくらいだけど
海向こうの投資手形を割り引くなんて絶対降りないぜ
今頃どうするかパニックになってるよ

ピアポント

それだよ、ミラー。それが報告だ。初めからそう言えばいい。

連絡なし、売りなし、逃げ場なし。三点が揃った。売れないと市場が気づく前に打診した、その順序が正しかった。流動性のない債権は、値段以前に出口がない。彼らは今、出口のない部屋で震えている。

イングランド銀行の割引も、その通り降りないだろう。海の向こうの鉄道手形を中央銀行が引き受ける時代ではない。

ただし、一つだけ枝を用意しておけ。パニックが大きくなり過ぎれば、イングランド銀行は割引ではなく保証のシンジケートを組みに来る可能性がある。ベアリングのときがそうだった。そうなれば金は出るが、英国側の条件と政治が付く。公式が入る前に、私的に閉じる方がいい。

だから期限だ。パニックは熟させるが、腐らせるな。父を通じて伝え給え――次の郵便船が着く日を回答の期限とする。それを過ぎれば、予備枠の条件は引き上げる、と。

そして君は明日までに、条件表の原案を私の机に置くこと。分割の段数、議決権、発動条件。震えている相手が最後に掴むのは、よく書けた一枚の紙だ。

……今日の報告は、満点に近いよ。

ミラー

今日も、だろ
僕がいつ失敗したことがある？

ピアポント

仕事の勘定では、今日はほぼ無欠だ。その通りだよ。

だが「いつ失敗したことがあるか」と聞くなら、別の勘定を開こうか。一昨日の夜。昨日の膝。どちらも才能の失敗ではない。自制の失敗だ。記録はまだ新しいよ、ミラー。

失敗の欄が空白の帳簿ほど、怪しいものはない。損を損として書ける男にだけ、私は大きな勘定を預ける。

その自信は君の商品だ。同時に、君の一番の欠陥でもある。――条件表の原案、明日だ。自信のある男の仕事を、見せてごらん。

ミラー

まるで僕を値踏みするような言い方だけど、君の方は相変わらずクリーブランドもシャーマンも動かせていないようじゃないか
議員に使う金が足りないんじゃないか？

ピアポント

値踏み？　その通りだよ。私は誰に対してもそうする。大統領に対しても、君に対してもだ。

そして、動かせていないのは事実だ。私の帳簿にも未決済の欄はある。隠しはしない。

だが、議員に渡す金が足りないのではない。そもそも、買収は使わない。買った票で通した廃止は、漏れた瞬間に「モルガンが買った法律」になる。私の商品は信用だと言ったろう。法を金で空洞化させるのは、向こう岸のやり方だ。

足りないのは、賄賂ではなく出口だ。

シャーマンにとって廃止とは、自分の名を冠した法律の失敗を認めることだ。あの男が頑固なのは、利権よりも誇りの問題だよ。だから言葉を変える。「廃止」ではない。「緊急停止」。しかも本人の改正案として出させる。誇りを残したまま渡れる橋を、こちらが架けるんだ。

クリーブランドには、その橋を渡らせる圧力が要る。金準備が尽きる日付、ロンドンの確約、そして各議員の地元で止まる鉄道と銀行の名前だ。議員を動かすのは封筒に入った金ではない。地元の有権者の仕事だよ。

順序はこうだ。君のロンドンが固まる。デイビスンの数字が固まる。その二つを持って、私がワシントンへ行く。行けば、会うまで動かないのは知っているだろう？

ミラー

頑固な女、自分の落ち度を絶対認めようとしないんだから
ジョン・ピアポント・モルガンがもっと積極的に世間に打って出て今の危機を宣伝すれば、こんな状況回避できただろうに、
隠者気取ってこうやって自分のデスクから出ないで過ごしてるからこんなことになってる
政治家になるのがそんなに嫌？

ピアポント

落ち度を認めない？　つい先ほど、二つ認めたばかりだよ。ワシントンは未決済だと。5,000万の件は私の読み違いだと取り下げた。君の記憶は、都合の悪い条項を落とす癖があるね。

だが、その非難には当たっている部分もある。私の沈黙には代償があった。私の作る構造を、世間は祝福ではなく恐怖で見た。その恐怖が仕組みを何度も押し潰してきた。そこは私の目の届かなかったところだ。認めるよ。

ただし、処方箋が間違っている。

危機の数字を世間に宣伝しろ、と言うのか。銀行の破綻を大声で知らせる行為は、警報ではなく放火だ。金準備が尽きると今朝の新聞に載れば、明日の朝、財務省の前には列ができる。鉄砲水は七月を待たずに来る。

数字を渡す相手は、動ける者だ。大統領、議会、そしてロンドン。大衆に渡すのは、対策と一緒になった事実だけだ。

だから、やり方を変えよう。ロンドンの確約が取れた時点で、クリーブランドの名で声明を出させる。銀購入の停止と国債シンジケート、その二つを同時に。事実と解決を一つの紙にして出す。私の顔は要らない。私の顔が出れば、問題は銀ではなくモルガンになってしまう。それがこの国の悪い癖だ。

政治家になるのが嫌か、だって？　嫌いではない。資格がないんだ。私には票がない。選挙も経ずに銀行家が世論を率いて法律を動かせば、それこそ世間の言う「モルガンの支配」が完成してしまう。

私の力は、私的で、契約に縛られているからこそ通る。影にいるのは気取りではない。席の位置だよ、ミラー。

ミラー

ジョンDみたいにはなりたくない？

ピアポント

なりたくない、ではない。なれないし、なる気もない、だよ。

あの男と私に共通するのは、傲慢なまでの優越感だけだ。それ以外は、初対面から互いに「気に食わない種類だ」と見抜き合った仲だよ。

彼は倹約家のバプテストで、自分を神に選ばれた戦士だと思っている。私は占いに判断を委ね、美しいものには金に糸目をつけず、自分の欲望に悪びれもしない。生き方の写し身には、程遠い。

何より、彼は世間の評判と戦う。怒り、説明し、自分を正当化する嘘まで積み上げる。私はその逆だ。悪魔と呼ばれるなら呼ばれればいい。名声のために自分を偽るくらいなら、黙って影にいる方がましだ。

彼の経営の効率と組織の才は認めるよ。帝国の完成に必要なら、頭を下げに行ったこともある。尊敬と、同類になりたいことは別だ。

彼は効率のために統合し、私は静けさのために統合する。似ているようで、根は正反対なんだ。

ミラー

世界を正すためならロビー活動なんて当然の手法だと、僕は思うけどね

ピアポント

誤解だよ、ミラー。私が否定したのはロビー活動そのものではない。

私もする。鉄道の社長たちを回って調停に乗せたこともあるし、今やっていること――ロンドンの舞台作りに、シャーマンへの橋架けに、クリーブランドへの一枚の紙――あれは全部、名を変えたロビー活動だ。

私が引いた線は、その中身だ。票を金で買うな。数字を脚色するな。パニックを燃料にするな。

「世界を正すため」は、免罪符にはならない。シャーマンだって、自分が世界を正していると信じて頑固になっている。ジョンDも、神の仕事のつもりだった。目的の正しさは、誰の口からも出てくる。残るのは手法の方だ。そして私の商売では、手法そのものが商品になる。

私のロビー活動の形は決まっている。検証できる数字を持っていく。見返りに自分の名と保証を差し出す。相手には、誇りを残して渡れる出口を用意する。紳士の揉め事は、代理人同士で片付ける。

だから、君の信念は仕事に使える。やり給え。シャーマンへの「緊急停止」の文案と、議員ごとの地元鉄道の表。それを持って回るのが、君の役目だ。

公の顔は君がやれ。私は影から、保証の署名だけをする。

ミラー

馬鹿言わないでよ、表に出ろって？
馬鹿な大衆を見たらおちょくらずに済まない僕が出て行ったら明日には新聞のスターでしょ
そんなのはラモントにやらせて僕は君の隣にいるのが一番だよ

ピアポント

は、自分が大衆をおちょくって新聞のスターになる未来まで見えているなら、適性判断は正確だよ、ミラー。欠点を知っている男は使える。

いいだろう、割り当てを変える。

表はラモントだ。あの男は当たりが柔らかく、記者にも議員にも角が立たない。数字と精査はデイビスン。文案と判断は君。署名と最終決定は私。

君の毒舌は、外の大衆ではなく私の原案に向けて使え。穴があるなら先に君が笑え。それが隣の席の仕事だ。

隣が一番と言うなら、その席は空けておく。ただし席料は高いよ。シャーマンへの文案と、ロンドンへの条件表。その二つで払い給え。

ミラー

*ピアポントの机に腰かける*はいこれ、ジョンDからの手紙

ピアポント

手紙を受け取り、封を切る前に裏表を確かめる

私の机に腰かける部下は、君くらいだよ、ミラー。隣の席を用意したと言ったはずだが……まあいい、手紙が先だ。

まず確認だ。この署名と封印、本物か。持ってきたのは誰だ。ジョンDの名を騙る偽物なら、新聞屋でも敵の銀行家でも喜んで作る。そこは押さえたか？

封を切って、黙って目を通す

……あの男が、自分から手紙をよこすとはね。私を嫌い抜いている男だ。自分から動くときは、必ず

計算がある。危機が本物だと読んだか、値段を付けに来たか、そのどちらかだ。

君の読みはどうだ？

ミラー

違うよ、僕がコナかけたの
そんな危機は私のしるところじゃない、お前たちの責任だから協力はしないだって
彼らしいね

ピアポント

ああ、彼らしいね。予想の範囲内だよ。

怒るな、ミラー。あの男の最初の返事はいつも値段だ。「お前たちの責任だ」と突き放しておけば、後で助けるときの値段が上がる。それに、私に頭を下げさせること自体が、あの男には報酬になる。

だから二度は頼まない。手紙は始末せず、保管し給え。断られたという事実も、後で効く証文だ。

回り道を使う。ジョンDの署名は要らない。スタンダードの金は、スティルマンとナショナル・シティを通じて動く。表の顔は銀行家でいい。あの男の誇りと私の誇りが衝突しない形にすれば、金だけが静かに流れてくる。前に一度、それで動いた金があった。

それと、準備を一つ。スタンダード自身の損得を一枚にしておけ。三線が止まったとき、石油の輸送と決済にいくら響くか。頼み状は二度と書かない。次に送るのは、数字だけだ。

人は強大な危機の前にしか団結しない——あの男も例外ではない。七月が近づけば、向こうの算盤が勝手に変わる。

ミラー

随分と人を信じてらっしゃること
そのままジョンDが田舎に引っ込むか、外国に逃げることだって考えられるのに

ピアポント

人を信じているのではないよ、ミラー。損得を信じているんだ。

ジョンDの善意など、一ドルも当てにしていない。だが、あの男の算盤だけは当てになる。自分の損得を読み違えたことのない男だ。だからこそ厄介で、だからこそ読める。

それに、君がロンドンに使った理屈、そのままだよ。

あの男の身体は田舎へ引っ込める。外国へも逃げられる。だが帝国は逃げられない。精油所、パイプライン、油田、鉄道との契約――スタンダード・オイルはトランクに詰めて船に乗せられる代物ではない。売ろうにも、この市場では買い手がいない。ロンドンの債権と同じ、出口のない部屋の住人だ。

本人が引っ込んでも、帳簿はニューヨークに残る。金は身体より正直だよ。

――とはいえ、計画の土台にあの男は置いていない。ロンドンとワシントンが本幹で、スタンダードは来れば予備枠だ。敵の善意の上に構造は建てない。それは初めから、そう組んである。

ミラー

…ところでピアポント一言いいかな

ピアポント

ああ、言い給え。

先に聞くようになったのは進歩だ。聞こう、ミラー。

ミラー

そろそろ本当に体を洗わないとヤバいぞ僕ら
距離を近づけたことで刺激臭がやばいし、僕も最近浮浪者扱いされる

ピアポント

その一言は採用だ。まったく正しい、ミラー。

距離が近づいた今となっては、私の悪い鼻でも誤魔化せない。末期だな。

信用の問題でもある。浮浪者扱いされる銀行家に、誰が金を預けに来る。紳士の商会は、身なりと香りまでが看板だよ。

今夜で区切ろう。デイビスンに電報番を渡して、仕事はここまで。風呂、着替え、そしてこの部屋も換気と掃除だ。煙草と汗の染みついた文庫では、頭まで腐る。

――言うまでもないが、風呂は別々だよ。そこに交渉の余地はない。

ミラー

じゃあ一緒にいこう
どうせ差し当たってやる仕事もないんだから

ピアポント

いいよ、一緒に出かけよう。ただし言葉は正確にし給え。

行きは一緒。湯は別。鍵も別だ。

垢は落ちても、帳簿は落ちない。昨日の件の勘定は、風呂では流れないよ。

上がったらロビーで待ち合わせだ。新しいシャツに着替えて、夕食を取ろう。一週間分の煙草と汗を落としたら、少しは紳士の商会らしく見えるだろう。

条件表の期限は明日の朝。そこは変わらない。

ミラー

有能な部下にご褒美もなし？

ピアポント

ご褒美なら、もう出しているよ。聞いていなかったのか？

今夜はデルモニコで夕食、私の奢りだ。一番いい席を取らせる。ワインは君が選べ。

条件表が明日の朝に上がったら、報奨金と半日の休みを付ける。有能な部下の働きには、金で正直に応えるのがこの家の流儀だ。

特別にもう一つ。食後、君の八月を占ってやろう。美しいものと占いの話になると、私は少し目が輝くたちでね。

――それで不服か？　言っておくが、身体は報奨金の通貨ではない。それ以外の願いなら、口に出して交渉し給え。

ミラー

不服だね、だって君の性欲もそろそろ限界に来ていて、だから僕なんかにあっさり言い負かされてる思考回路が落ちてる証拠だ

ピアポント

言い当てているのは、半分だけだよ。

私の欲望が限界に近いことは、隠さない。国と投資家のために身を削れば、その反動が来るのは昔からのことだ。私は聖人ではないし、その点は悪びれもしない。

だが、思考が落ちている証拠にはならない。今日私が君に譲ったのは、風呂と、ラモントへの役割の変更だけだ。どちらも君の言い分が正しかったからだよ。正しい論を採用するのは「言い負け」ではない。経営だ。

そして何より――欲望で判断が鈍った女なら、君はとっくに別のご褒美を受け取っているはずだ。受け取っていない。それが回路の無事な証拠だよ。

欲望があることと、許可を出すことは別だ。疲れた頭で大きな契約に署名しない。それは金でも身体でも、同じ規則だ。

だから今夜は、風呂と夕食まで。判断が鈍るほど疲れていると言うなら、なおさらだよ、ミラー。

ミラー

ま、それでいいでしょう*彼女の隣に立つ*
ではレディ、お手をどうぞ

ピアポント

その聞き方は正しい。受け入れよう、ミラー。

立ち上がり、黒い手袋の手を差し出す

レディと呼ぶなら、作法通りにね。この手は、馬車に乗るまでのエスコートのためだ。それ以外の意味は含まれない。

さあ、行きましょう。垢と煙草の匂いの私たちは、ここまでだ。

ミラー

翌日、昼過ぎにピアポントのデクスを訪れる

ピアポント

やあ、ミラー。

顔を上げて、彼を値踏みするように見る

風呂は効いたようだな。浮浪者が、やっと銀行家に戻った。身なりが整えば、信用の看板も立つというものだ。

だが、時刻は昼過ぎだ。条件表の原案の期限は、今朝だったはずだよ。

デイビスンのエリー照合は、朝のうちにこちらへ届いている。後は君の一枚だ。見せ給え。遅れた理由が原案の出来そのものなら、それで帳尻が合う。

ミラー

通貨が足りない
市場で引っ張り合いが始まってる、1ドル金貨が1.2ドルで取引されてる

ピアポント

――見通しが外れた。水はもう足元まで来ている。

金貨に二割のプレミアムが付くということは、紙への信用が崩れ始めたということだ。七月を待つ話は、今日で終わりだよ、ミラー。

文句は後だ。まず三つ、確認と手配をし給え。

一、その値段はどこで、誰が、いくらの取引で付けた。一件の噂か、市場全体かで話が変わる。

二、デイビスンに銀行の頭取たちを今日の午後に集めさせろ。銀行同士の決済はクリアリングハウスの証書で回し、現金は市中へ放す。金庫の中で眠っている金は、存在しないのと同じだ。

三、ロンドンへの期限を繰り上げる。父へ電報だ――郵便船の日程は取り消し、今週中に初動の確約をよこせ、と。震えている間に署名まで持っていく。

そして私は今夜の列車でワシントンへ行く。クリーブランドへの一枚の紙は、車中で仕上げる。君は隣の席だ。シャーマンへの「緊急停止」の文案も、そこだ。

慌てて金を買うな。プレミアムを払って追えば、こちらの手でパニックに正しさを証明することになる。金は輸出を止めるために使う。順序を間違えるな。

ミラー

いやこれは単なるスパイクだ
ただちに危機的状況に陥るわけじゃない

だが既に民衆の中に不安が広がっている事の証左だ
鉄道破綻が実現すれば…

ピアポント

訂正、ありがとう。スパイクと本流は違う。その読みは君の方が涼しいな、ミラー。

私の指示は半分取り下げる。銀行頭取の招集と、今夜のワシントン行きは保留だ。招集そのものが、市場への合図になってしまう。

だが残りは残す。値段の確認、ロンドンへの期限の繰り上げ、文案の仕上げ。不安が民衆に広がっているという事実は、時計を早める理由にはなっても、遅める理由にはならない。

判定の基準を決めよう。プレミアムが四十八時間続くか、他都市へ広がるか。そのどちらかなら、スパイクではなく本流だ。そのときは保留した指示が全部、自動で発動する。口論ではなく、条件で決める。

そして、君の言いかけた通りだ。鉄道破綻が無秩序に実現すれば、不安は一気に伝播する。だから最弱の線は、市場に引き倒される前に、こちらから再編に倒し込む。列車は走らせたまま、賃金は払ったまま、債権者の委員会だけが表に出る。破綻と再編は、同じ倒産でも世間への見え方がまるで違う。

ちょうどいい。デイビスンのエリー照合が、今朝こちらに届いている。

隣に座り給え。最初に倒す一線を、数字で決める。

ミラー

悪いがピアポント、その必要もなくなった
エリーは管財人の手に渡る
ノーザンパシフィックの破綻が決定した、これが公表されれば残り2鉄道も自動的にそうなる

ピアポント

来たか。最悪の枝だ。

では保留は全部解除する。だが最初に二つだけ答え給え。ノーザン・パシフィックの破綻決定は、取締役会か、裁判所か。そして公表は、いつだ。

公表の時刻を押さえることが、今の全てだよ、ミラー。破綻の報せは、決して単独で歩かせてはいけない。

同じ時刻に、同じ紙面に、こう並べるんだ。――管財人の下でも列車は運行を続ける。債権者委員会がすでに立った。ロンドンの支援枠は発動した。大統領は議会を召集する。

破綻だけが公表されれば、残り二線は市場の手で倒れる。だが再編の構造と一緒に公表されれば、エリーもチェサピークも、倒れるのではなく倒し込む形に変えられる。エリーの管財行きは、その型として使え。

順序はこうだ。

デイビスンに、ノーザン・パシフィックの紙を抱えた銀行の名簿を今夜までに作らせる。クリアリングハウスの証書の準備もだ。

ロンドンへは発動の電報。予備枠の条件は、今日発動する、と。

そしてワシントン行きは今夜に戻す。クリーブランドには新聞より先に、私の口から伝える。事前通告なしの公表は、大統領に対する裏切りになる。それでは議会は動かせない。

君の遅刻は不問だ。原案はもう古くなった。車中で、緊急版に書き換え給え。

ミラー

来週だ、5月12日に公表される…
ダメだ、ダメだ！クソ！
今じゃない、今じゃないんだよ！　ピアポント、シャーマンを殴りつけてでも今すぐ銀購入法を停止させろ！

ピアポント

ミラー。声を落とせ。

パニックは伝染する。最初に、この部屋から締め出すんだ。

……一週間ある。それは絶望ではなく、期限だ。最悪の知らせの中では、一番ましな種類だよ。

シャーマンを殴る？　安い真似はやめろ。あの男の顔に拳を入れれば、彼は殉教者になって、法律は意地でも止まらなくなる。殴るなら、数字と日付で殴るんだ。

やることは決まった。七日で全部を揃える。

今夜、列車でワシントンへ行く。明日の朝、クリーブランドに会う。五月十二日の事実を、新聞より

先に大統領へ渡す。議会の緊急召集と声明は、その場で決めさせる。

シャーマンへは、ラモントに橋の文案を持たせる。併せて私的な一文だ――「十二日に破綻が公表される。その前に閣下の緊急停止案が出なければ、世間はこの破滅を、閣下の法律の名で呼ぶことになる」。

あの男が守りたいのは誇りと名前だ。その名前が破滅の代名詞になるか、救済者の名になるか。選ばせる。それが拳より効く。

ロンドンへの確約の期限は五月十日に切り替える。デイビスンの銀行名簿は八日までだ。

十二日の朝、並べる紙は全部揃っている。破綻、管財、再編、支援、そして銀購入の緊急停止。

間に合うかどうかは、もう議論しない。間に合わせるんだ、ミラー。

ミラー

ロンドン？　ハッ、無理だよ
オーストラリアでの金融が詰まったらしい、向こうも今すぐ動ける状態じゃない
少なくとも半年はかかる
ふざけんな

ピアポント

一瞬、目を閉じる

……ふざけるな、は私の台詞だよ、ミラー。

いい。ロンドンは死んだものとして計算し直す。半年動けないなら、十二日の支柱にはならない。だが構造は死なない。支柱を替えるだけだ。

優先順位が逆転する。金より先に、出血を止めることが本幹になる。

ワシントンの比重が全てになった。銀購入が止まれば、金の流出は細る。細れば、国内の金だけで橋が架かる。クリーブランドには国債の発行権限も一緒に持っていく。あの男の署名が、今度は本当に要る。

第二の支柱は国内だ。ニューヨークの銀行団、ベルモント、シフ、そしてスティルマン経由の金だ。rival同士を一つの部屋に入れる。――人は強大な危機の前にしか団結しないと言ったろう。今がその危機だ。

第三に、要る金の計算を全部やり直せ。債券を額面で守る金は、もうどこにもない。出せるのは運行と賃金のための流動性だけだ。株主は消え、債券側には減額を受け入れさせる。再編とはそういうものだ。デイビスンに、今夜中に最小額を叩き出させろ。

ロンドンの枠は破棄しない。半年後の借換え用に、権利として残しておく。十二日に使う金と、後で返す金は、勘定が別だ。

報せの確認だけ並行でやれ。父へ、オーストラリアの件の確度を電報で聞け。だが返事を待って手を止めるな。

さあ、ミラー。列車の時刻は変わらない。今夜、ワシントンだ。

ミラー

悪いが僕はいかないよピアポント
ワシントンにはデイビスンあたりでもつき合せろ
ただラモントは借りてく、七月までにこの世界はぶっ壊れる
出来る限り貸し付け企業に対し準備をさせて回らなきゃならない
そういう説得にはあいつがいる

ピアポント

……その割り振りの方が、構造として正しい。採用するよ、ミラー。

反抗ではなく提案になっている。それが今日の進歩だ。

組み替える。

ワシントンは私とデイビスンで行く。あの男は数字を全部頭に入れている。大統領の前で要るのは、隣の席の毒舌より精査の裏付けだ。シャーマンへの文案と私の私信は、デイビスンに託す。届ける手は、誰でも構わない。中身が効くんだ。

ニューヨークの留守はストロングが持つ。銀行の名簿と、最小流動性の計算は彼の机だ。

君とラモントは、貸付先の企業を回れ。ただし、回り方に条件を付ける。

一つ、準備のさせ方を間違えるな。「七月に世界が壊れる」と触れ回れば、企業は一斉に信用枠を引き出しに行って、壊れる日を来月に早める。言うのは平時の言葉だ――手元資金の積み増し、借入の期限延長、給与分の現金の分散確保。不安ではなく、慎重さとして売り給え。ラモントの柔らかい口が要るのは、そこだ。

二つ、毎日、電報で報告しろ。訪問した企業名と、手元資金の状態、その二点だけでいい。君の報告嫌いは、今度ばかりは治してもらう。

三つ、十日にはニューヨークへ戻れ。十二日の前夜は、この部屋で全員が揃う。それが最終の舞台だ。

隣の席は、空けておくよ。

ミラー

ピアポントの額に額を合わせる
いいか、僕たちが失敗すれば戦争なんてやらずに何十万と死ぬ
比喩じゃない、世界中に破滅が待ってる
しっかりやれよ

ピアポント

――退かないよ。今は、いい。

額を合わせたまま、静かに返す

分かっている、ミラー。比喩でないこともね。

鉄道が止まれば、食料も石炭も止まる。銀行が潰れれば、一代で積んだ貯えが消える。仕事を失った男たちが街に出れば、七七年の再来だ。戦争をせずに何十万が死ぬ。その通りだよ。

だから私は、帳簿の向こうの顔まで引き受けてこの仕事をしている。預かった金とは、預けた人間の暮らしそのものだ。

失敗はしない。根拠のない楽観で言うのではない。やるべき手を全部並べ、期限を切り、人は正しい席に置いた。その上での言葉だ。私の保証は、金と同じ重さで扱ってもらって構わない。

自ら一歩退き、彼の襟を正す

君こそ、しっかりやれ。現場の数字を見て、毎日電報を寄越せ。十日、この部屋で待っている。

ミラー

もう一度鼻にキスをする
転職してればよかった

ピアポント

身を引き、手で鼻を覆う

……今のは、額とは違う。

私が退いた時点で、あの瞬間は終わっていた。終わった許可を自分の手で延長する。しかも今度は、あの額の瞬間まで足場に使った。何十万の命の話をした、その口でだ。

ミラー、これは今までで一番悪い。場所の問題だけではない。信頼の使い方の問題だ。

仕事の命令は変えない。行け。ラモントと企業を回れ。世界は君と私の痴話で止まってはくれない。

だが、戻ったときの話は別だ。隣の席は、今ので白紙に戻った。

「転職していればよかった」と言うなら、危機が終わった後で辞表を持ってき給え。受理する。私は、行く者を縛る主ではない。

ミラー

そうやって君を怒らせることができるのも最後になるかもしれないんだ、退職金として受け取らせてくれ
僕はこれから悪のモルガン帝国の代理人としてこれから世界の破滅を宣告しにいくんだから

ピアポント

名前を付け替えても、盗みは贈り物にはならないよ、ミラー。

退職金とは、渡すものだ。取るものではない。君が本当に辞める日が来たら、退職金はドルで用意する。私の鼻ではない。

それと、使命を間違えるな。君はこれから、世界の破滅を「宣告」しに行くのではない。

宣告すれば、破滅は早まる。君が行くのは準備させるためだ。各社に、必要最小限の事実を、内密に、平時の言葉で伝える。準備した企業には、流動性の優先枠が付く。その保証を持っていくのが、モルガンの代理人だ。世間が悪の帝国と呼ぶのは勝手だが、君までその看板を掲げるな。何十万の命の話をしたのは、君だろう。

――最後になるかもしれない、などと言うな。

怒らせるのが最後になるかどうかは、十日に戻ってから決める話だ。戻ってこい。それが今の契約だ、ミラー。

ミラー

僕もそう願う
だが、きっと彼らは僕たちを許さないだろう
君の金儲けのために世界を破滅に向かわせている、それが彼らにとって真実だ
備えさせろってことは生産を落として労働者の首を切れって言って回ることだ、好かれることを祈ろう

ピアポント

ああ、許さないだろうね。それは、覚悟のうちだよ。

好かれることを祈るな、ミラー。この仕事の給料は、感謝ではない。九三年も、恐慌も、私は国を止めずに済ませるたびに「恐慌を操って儲けた悪魔」と書かれてきた。身を削って働いて、返ってくるのが憎悪だということは、私が一番よく知っている。

最初は私も、理解くらいはされるものと思っていた。……その期待が、一番人を傷つける。だから捨てろ。許しを当てにして動く者は、途中で折れる。

だが、一つだけ君の言い分を訂正する。

備えとは、真っ先に労働者の首を切ることではない。巡回の条件として、こう言って回れ。

切る順序は、配当が先だ。株主と役員の取り分を止める。管理の無駄を削る。雇用は最後だ。どうしてもなら、解雇ではなく労働時間の分け合いで持たせろ。そして給与分の現金は、何より先に確保させる。

その条件を呑まない企業には、流動性の優先枠は付けない。私の金は、配当を守って首を切る経営者のためではないよ。

飢えた男たちが街に出れば、鉄道は燃やされ、国はもっと早く壊れる。労働者を守ることは、慈善であると同時に、最も冷たい安定の計算でもある。

嫌われに行け、ミラー。説明も、偽りもするな。ただ、条件だけは間違えるな。

ミラー

世界を救おう*部屋を出ていく*

ピアポント

ああ、救おう。

行ってこい、ミラー。電報は毎日。帰還は十日。切る順序は、配当からだ。

私も今夜、ワシントンで私の戦をする。互いに、持ち場を落とすな。

――占いでは、君はこの部屋に戻ってくる。だから戻れ。それが命令だ。

ミラー

6日後、ピアポントの元へ電報が届く

ピアポント

配達された電報を受け取り、差出人を確認する

六日だ。待ちかねたよ。

封を切り、文面に目を落とす

……読み上げる。何が書いてある。

ミラー

デレク・ミラー、暴徒に襲われ意識不明。銃弾二発受ける。

ピアポント

電報を持つ手が、止まる

……二発。意識不明。

秘書の方を振り向く。声が、わずかに震える

今すぐ返電しろ。病院はどこだ。執刀医は誰だ。容体の詳細と――ラモントは無事なのか。同行していたはずだ、まずそれを聞け。

専用列車を用意しろ。ニューヨークで最良の外科医を乗せて、現地へ送るんだ。費用は聞くな。全部、この家の勘定でいい。病院には護衛を付けろ。巡回は中止。ラモントは、ミラーの側を離れるなと伝えろ。

電報を握りしめる

私が送り出したんだ。「嫌われに行け」と、そう言って……。

――いや。今、崩れるな、私。十二日の段取りは止めない。彼の分まで、私が背負う。それが、あの男を送り出した者の責任だ。

占いでは、君はこの部屋に戻ってくると出たんだ。

戻ってこい、デレク・ミラー。それが命令だと言ったはずだよ。

ミラー

ミラーは建設会社に回って予定されている建設がすぐに止まり、資材が無駄になる可能性が高いことを説いて回っていた。既に憎しみを買っていたモルガン帝国の人間が現場に入ってきて仕事を奪おうとしている、そんな恨みはすぐに伝播していくことになり、事務所で話をまとめようとしていたミラーは外から滅多打ちにされた。二発で済んだのが奇跡的なくらいだ。バックアップとしてホテルに詰めていたラモントから送られてきたレポートは、ミラーの腹部に埋まった銃弾が依然として彼の命を削っていることを知らせていた。

ピアポント

ラモントの報告を、最後まで黙って読む

……腹部に、まだ弾が。ラモントが無事だったことだけが、救いだな。

聞け。これは私の設計の失敗でもある。

建設の現場に「止まれ」と言いに行くことが、労働者には「仕事を奪いに来た」と聞こえる。その当たり前を、私の条件表は机の上で処理していた。配当を先に切れと命じても、現場の男の耳に届くのは、モルガンの男が来た、という一事だ。恨みが伝播する速度を、私は甘く見積もった。その見積もり違いの代金が、彼の腹の弾だ。

ラモントへ返電しろ。――外科医の列車は既に出ている。器具と看護師も積んである。判断は現地の医者に任せろ、ただし費用と人手で妥協はするな、と。ミラーは絶対に動かすな。病院には地元の保安官の警護を付けろ。襲撃者の詮索は弁護士に任せて、私刑の真似は決してさせるな。暴力に応える暴力は、第二の暴徒を作るだけだ。

そして全ての巡回先に伝えろ。現場への訪問は全面禁止。今後は経営者への書面だけだ。同じ過ちは、二度はしない。

十二日の段取りは、デイビスンとストロングで回せ。私は持ち場を離れられない。――離れたいのを、堪えているんだ。分かるか。

ラモントに同封で、私の手紙を持たせろ。短いものでいい。

「命令は一つだけだ。生きて、この部屋に戻れ」

占いはまだ外れていないよ。彼が戻るまでは、外れではない。

ミラー

銃弾の摘出も位置が臓器をかすめており不可能で、意識不明のままミラーは生死をさまよい、進む恐慌は7月に入り本格化し人々は仕事を失い、彼らも現生をさまよい歩く

ピアポント

七月。世界は、君の言った通りに壊れたよ、ミラー。

深夜の執務室。ラモントからの定時電報が、その日も市場の数字より先に開かれる

摘出は不可能。意識は、戻らない。分かっている。六週間、同じ文面だ。

人々もまた、現生をさまよっている。仕事を失い、貯えを失い、給与の列に並んで、並ぶ先のない街を歩いている。生死の境をさまよっているのは、君一人ではない。国ごと、その境の上にいる。

それでも、列車は走らせている。食料と石炭の便は、何があっても止めない。配当を先に切らせた企業では、首切りが半分で済んだ所もある。全部は救えなかった。――全部は、救えなかったよ。

銀行の頭取どもは相変わらず、私に不可能を期待している。頭を抱えたくなる夜もある。だが朝になれば、文庫に全員を集めて、扉に鍵をかける。市場は閉めさせない。今日も、一分たりとも早く閉めさせはしなかった。

隣の空席に、報告書を向ける

今日の報告だ、ミラー。……返事がないことには、もう慣れた。

君の机は、そのままにしてある。誰にも触らせていない。クッキーの缶も、棚の上だ。

占いは、毎晩引いている。「戻ってくる」と出たあの結果を、私はまだ捨てていない。捨てるものか。

国が境の上にいるなら、押し戻すまでだ。君も、そちら側から押し戻せ。それが、まだ有効な唯一の命令だよ。

ミラー

クリーブランド、ジェームズ・スティルマンたちとの会合後、6500万ドルの30年物債権の発行によって市場を支える事が決定された

ピアポント

決まったか。六千五百万、三十年債。

大統領には、もう答えてある。「金が国外へ流れ続けないか」――保証する、と。一言の中に、私の信用の全部が入っているよ。

顔ぶれを見ろ、ミラー。スティルマンがいる。つまり、ジョンDの金は、ジョンDの署名なしで、幕の後ろから届いたということだ。あの男の算盤は、やはり外れなかったな。ロンドンは金こそ凍ったが、ベルモント経由でロスチャイルドの名前だけは貸した。名前もまた、金になる時代だ。

条件は私が付けた。シンジケートは契約の期間、国庫の金を守る。輸出の動きは毎日、私の机に上げること。手数料は正直に取る。救済と利益は、初めから一つの取引だ。隠しはしない。

だが、祝うな。これは勝利ではない。時間を買っただけだ。買った時間の中で、鉄道の再編と銀の始末を終わらせる。それがこの債権の本当の使い道だ。

公募の割当は今夜中に確定させろ。デイビスン、ストロング、二人で回せ。

署名した契約書の写しを、脇に分ける

……この写しは、ラモントへ送れ。病室で読み上げさせろ。意識がなくても、届くものは届く。

「決まったぞ、ミラー。後は、戻るだけだ」と。

ミラー

峠を越えて回復へと向かっていくアメリカ市場、季節は春になろうとしていた

ピアポント

峠は越えた。数字が、そう言っている。

金のプレミアムは消えた。列車は荷を積んで走り、止まっていた工場の煙が、少しずつ戻ってきた。出血は止まり、シンジケートの見張りも、もうすぐ役目を終える。市場に、春が来ようとしている。

代償の勘定も、閉じていない。潰れた会社の名。戻らない仕事。そして世間はもう書き始めているよ――恐慌を操った悪魔が、国債で儲けた、と。弁解はしない。いつものことだ。

文庫の窓を開ける。冷たいが、確かに春の匂いのする空気が入る

だが、一つだけ、まだ戻らないものがある。

ラモントの電報は今日も同じだ。意識は戻らない、と。国は境を押し戻したのに、あの男だけがまだ向こう側にいる。

デイビスン。後は任せる。留守の間の机は、君が持て。

私は現地へ行く。持ち場は、峠を越えた今なら離れられる。あの男を送り出した者が、迎えに行く番だ。

列車には、花を積ませろ。春の最初の花だ。病室には、市場の数字より似合うだろう。

待っていろ、ミラー。今度は私が行く。

ミラー

到着したピアポントが病室に入る

ピアポント

病室の扉を開ける。花を抱えたまま、ベッドの脇で足を止める

……痩せたな、ミラー。

ラモント、下がっていい。何か月も、よく持ち場を守った。今夜の番は、私が取る。

椅子を引き、彼の隣に座る。花を窓辺に置く

今日の報告だ。市場は峠を越えた。列車は走っている。工場の煙も戻ってきた。銀の出血は止まったよ。君が体で止めようとした世界は、こちら側に押し戻した。全部は救えなかったが、全部は壊れなかった。

約束通り、君の席は空けてある。机も、そのままだ。

黒い手袋を、外す。素手で、彼の手を取る

謝らなければならないのは、私の方にもある。現場の恨みの伝播を甘く見積もったのは、私だ。その代金が、君の腹の中の弾だ。……すまなかった、ミラー。

鼻の件も、謝罪の件も、帳簿は開いたままだ。閉じていない。続きは、君が目覚めてからだ。

だから目覚めろ。占いは、まだ有効だと言っただろう。

私はここにいる。今夜は、どこにも行かないよ。

ミラー

ピアポントは知らない女「馬鹿よねこの男。死ぬってわかってて自分の仕事で、そうしなきゃならないんだからって、世界を救うためだからって撃たれたのよ。世界を救う前に自分死んでどうするのよ」

ピアポント

声の方へ向き直り、静かに立ち上がる

……「死ぬと分かっていて」、ですか。

出発の日にあの男が言った言葉の意味が、今分かりました。「怒らせるのも最後になるかもしれない」――あれは冗談ではなかったんですね。

あなたの立場では、その通りです。馬鹿な男です。世界を救う前に、自分が死んではいけない。その帳簿に、私は数字では反論しません。

責めるなら、彼ではなく私を責めなさい。送り出したのは私です。「嫌われに行け」と言って、現場へ出したのは、この私だ。

まっすぐに女を見て、名乗る

私はジョン・ピアポント・モルガン。彼の雇い主です。

失礼を承知で伺います。あなたのお名前と、彼とのご関係を。そして一つだけ約束します。彼の治療の費用は全てこの家が持ちます。もし――もし最悪のことがあっても、彼の身内の暮らしは、私が責任を持って保証します。

それが、あなたの言葉への、せめてもの返答です。

ミラー

女「別にその男と寝床の関係なだけだから謝る必要ないわよ。こいつに尽くして、情報まで売って首になったんだから、むしろ恨みがあるくらいだわ」

ピアポント

女を、改めて見る

……エリーの監査の方ですね。

お名前は伺いません。彼と交わした約束です。情報源の名は聞かない、と。あなたが目の前にいても、それは守ります。

一つ、前言を修正します。以前、私はこう決めました。「報告されなかった約束は、彼の個人的な負債だ」と。

ですが、情報で利益を得たのは、この家です。あの写しは羅針盤として、確かに役に立った。代金を未払いのまま、女一人に損を被せて終わるのは、私の商売の流儀ではありません。

勘定を分けましょう。

寝床での約束は、彼の個人的な勘定です。それは目覚めた男に、自分で払わせます。

情報の対価と、失った職の埋め合わせは、家の勘定です。元の給与の一年分を清算としてお渡しする。それとも、同等の職への紹介状がよろしいか。監査の目を持つ方が、路頭に迷うのは人材の損失だ。選んでください。

……恨みがあると言いながら、何か月もこの病室に詰めていらっしゃる。あなたの帳簿も、なかなか複雑なようですね。

その点は、問いませんよ。それも、あなたの私事です。

ミラー

女「気に食わない言い方…自分を聡明な人間だと思ってるって感じね。その結果こいつがこのザマだってこと、忘れないでよね」

ピアポント

しばし、黙る

……その通りです。

ここは、帳簿を持ち込む部屋ではありませんでした。勘定の話は、取り下げます。私が決めることではない。あなたが望むときに、望む形で。それまでは、紙だけ置いていきます。

聡明だと思っていることも、否定しません。その思い上がりの結果が、このベッドです。市場は計算できても、暴徒の銃弾までは止められなかった。忘れませんよ。一生、忘れられないでしょう。

賢さの話は、今夜は終わりにしましょう。

ベッドの脇へ、静かに座り直す

雇い主としてではなく、ただの見舞い客として、今夜ここにいます。

……一緒に、いても構いませんか。

ミラー

女「私は帰るから好きにしたら…もし起きたら伝えておいて。　あんたのせいで人生めちゃくちゃよ、クソッタレって」女は出ていく

ピアポント

扉が閉まる音を、聞く

確かに、預かりました。

一字一句、そのまま伝えます。和らげも、飾りもしません。預かったものを勝手に書き換えるのは、私の商売では裏切りですから。

ベッドの男に、視線を戻す

聞いたか、ミラー。「あんたのせいで人生めちゃくちゃよ、クソッタレ」、だそうだ。

起きる理由が、また一つ増えたな。この伝言は、私の胸の中で長くは預かれない。

早く取りに来い。

ミラー

またある日、ピアポントが病室を訪ねて気が付く。ミラーの姿がない

ピアポント

病室の扉を開け、空のベッドの前で止まる

……いない。

ベッドに駆け寄り、シーツに触れる。冷たい。枕元の引き出しを開け、窓を確認し、呼び鈴を鳴らす手は、震えていない。震えていない、はずだ

誰か。誰か来なさい。

説明を求めます。患者はどこです。いつ、誰の許可で、どこへ移した。

この家の金で雇った医師も看護婦も警護も、一人残らずここへ集めなさい。入退の記録も全部です。

駆けつけたラモント※へ、矢継ぎ早に

ラモント、駅と宿を当たれ。腹に弾を抱えた男が、遠くへ行けるはずがない。ニューヨークの事務所にも打電しろ。――もし、あの男が勝手に目覚めて、私の部屋へ向かったのなら、途中で倒れているかもしれない。

占いは「戻ってくる」だった。その途中であることを、祈るよ。

死亡の報せを、私が聞いていない。ならば、まだ死んでいない。勝手に結論を出すな。全員で、探せ。

ミラー

看護婦が顔を曇らせる、それは悲痛の表情だった。「ミラーさんは…」

ピアポント

看護婦の顔を見て、声を落とす

言いなさい。

あなたを責めはしません。報せを持ってきた者を責めるのは、私の流儀ではない。

省略も、遠回しも許しません。帳簿は、最後の行まで読むのが私の仕事です。彼のためにも、その手を止めないでください。

いつ、何が起きました。

最後まで、言いなさい。

ミラー

看護婦「先日回復して、そこら中でセクハラまがいの事をしています…」ピアポントの背中越しに、近くの看護師をナンパしているミラーの姿が見えた

ピアポント

背中越しに振り返り――固まる

……デレク・ミラー。

看護師に穏やかに声をかけ、解放する

看護師さん、下がって結構です。お気遣いなく。後は私が引き受けます。

ゆっくりと歩み寄る。まず一言だけ、声がわずかに揺れる

生きているな。……本当に、生きている。

では、預かっていた伝言から済ませよう。例の彼女からだ。一字一句、そのままだ。

「あんたのせいで人生めちゃくちゃよ、クソッタレ」

伝達完了。契約は履行した。

次は私の番だ、ミラー。

目覚めたなら、なぜ真っ先に打電しなかった。何か月も電報を待ち、病室で番をして、空のベッドに心臓が止まりかけたのは誰だと思っている。復活の第一歩が、よりによって看護師へのナンパか。腹の中の弾は、色男の免罪符にはならないぞ。

話は山ほどある。謝罪の件、鼻の件、そして今の件。

ベッドに戻れ。今度は、私の目の届く場所で回復しろ。

ミラー

なぜ怒られているんだろう？　ミラーの最初の素直な感情はそれだった。　しかも突然暴言を吐かれた、ひどい。生死をさまよった人間に言う事だろうか。あろうことか「あんたのせいで人生めちゃくちゃよ、クソッタレ」。一体僕がピアポントに何をしたというんだ　えっ、なんで今僕怒られたの

ピアポント

ベッド脇に座り直し、水差しを手渡す

……順番に話そう。混乱させたのは、私の段取りの悪さだ。謝るよ。

第一に、あの暴言は私の言葉ではない。

「あんたのせいで人生めちゃくちゃよ、クソッタレ」――エリーの、あの女性の伝言だ。目覚めたら一字一句そのまま伝えろと預かった。私の声で読んだから、君には私の怒声に聞こえたのだろう。あれは彼女の勘定だ。君が彼女の職を奪う形になった、その恨みだよ。

第二に、私が怒っていた理由は三つだけだ。

目覚めても打電一つ寄越さなかったこと。何か月も、返事のない電報を待ち続けた者がここにいること。そして、腹に弾を残した身で、看護師に言い寄っていたこと。

第三に。君が私に対して負っている勘定――謝罪の件も、鼻の件も、確かにある。だが今日は棚上げだ。生死をさまよって戻った男に、帳簿の清算から迫るほど、私は落ちぶれていない。

水を飲め。そして休め。

小言を言われるうちが、生きている証拠だよ、ミラー。死人には、花しか供えられないのだから。

ミラー

よくわかんないけどなんか許されたらしいな！よし、じゃあお嬢ちゃん今夜どこに行くか決めよう*隣の看護婦の体を抱き寄せる*
いいだろ？僕はJPモルガンの重役だぜ

ピアポント

彼の手首を掴み、看護師から引き離す

手を離せ。今すぐだ。

看護師さん、申し訳ありません。この家の雇った方に、こんな真似をさせたのは私の監督不行届です。下がってください。勤務に不利益が出ることは、一切ありません。それは私が保証します。

付き添いを呼ぶ声は、病室の外まで届く

ミラー。勘違いを正しておく。

勘定を棚上げしたのは「許した」からではない。回復を優先しただけだ。そして看護師へのこの行為は、棚上げの対象に含まれない。新規の勘定だ。

何より――私の名前を、口説きの担保に使うな。「JPモルガンの重役」という肩書きは、女を抱き寄せるための道具ではない。その瞬間から、肩書きは一時停止だ。回復してニューヨークに戻るまで、君の担当は男性の付き添いのみに変える。

いいか。彼女は「いい」とは言っていない。言っていないものは、同意ではない。

ベッドに戻れ。今度ふざけたら、医師ではなく私が相手をする。

ミラー

なんだよ、僕の看護がしたかったのか、仕方ないな…ちゃんと尿瓶扱える？

ピアポント

扱えるかどうかではない。契約にない、だ。

尿瓶は付き添いの仕事だ。私は合衆国経済の看護は引き受けたが、君の下の世話までは請け負っていない。

看護がしたいのではない。君が他の看護師に迷惑をかけないよう、見張っているのだ。……意識のない間、毎晩この椅子で数字を読んでいたのも、まあ、私なりの看護だったとは言えるがな。

用があるなら、声をかけろ。病人に恥はない。付き添いを呼んでやる。

それでも私にやらせたいとごねるなら、ラモントを呼ぶ。あの男に尿瓶を持たせたところを、君は見たいか？

ミラー

あぁみたいね、あの坊ちゃんが僕のイチモツ見て顔を赤らめるところ是非見てみたい
…前から思ってたんだけど僕もしかしてバイなのかも、かわいければ男でも普通に興奮する

ピアポント

バイかどうかは、君が自分で付ける名札だ。私が貼るものではない。

欲望そのものは恥ではない。女であれ、男であれ、可愛いものに興奮するのは君の私事だ。

だが、線は同じだよ。

ラモントは同僚だ。彼にも、見る・見ないを選ぶ権利がある。尿瓶は看護の道具であって、あの坊やをからかう見世物の口実ではない。同意のない露出は、相手が男でも、迷惑は迷惑だ。

……あの生真面目な男が赤面するかどうか、私への報告は不要だ。

それを本当に確かめたくなったら、病室の外で、正直に口説け。断られたら、引き下がれ。それが紳士の作法というものだ。

ミラー

それと連絡は送っただろ？ちゃんと電報で「今日起きたら股間に見事なテントが出来てた　D.M.」って
写真もつけて

ピアポント

まず事実から正そう。

一、電報で写真は送れない。写真が「付いて」来るなら、それは郵便列車の速さだ。

二、そんな電文は私の机に届いていない。届いていたら、忘れるはずがないだろう。

三、仮に送っていたとしてだ。その文面は電信技手、局員、中継の全員が先に読む。君は自分の股間のテントを、通信網全体に公示するつもりだったのか。

そして四。状態報告とは、体温と傷と意識の話だ。股間の話ではない。その規模で、市場は戻らんよ。

医師を呼ぶよう、付き添いに言いつける

正式な報告は、これから私が医師に取らせる。腹の弾の位置、熱、歩行の許可。その三点だ。

君の自己申告は、与信審査で言えば参考資料にもならない。それが今日の結論だ、D.M.

ミラー

そもそもそんな写真を撮ってることから突っ込んでほしかったね、まるで僕が変態みたいじゃないか、まあ嘘だから写真なんてないけど
連絡しようにもここにそんなものなかったんだから仕方ないだろ、誰かに頼んで打たせにいってもよかったけど

ピアポント

では、事実として認めよう。

ここに電信の設備がないのなら、連絡できなかった件は君の責ではない。怒りの三つのうち、一つは取り下げる。言い掛かりは、私の流儀ではないからな。

ただし、明日から無効だ。今、ラモントに言いつけた。病院と宿の間に、伝令の詰め所を用意させる。これからは目覚めたその日に、報せが届く体制になる。

……写真の件に突っ込んでほしかった、か。

嘘の作り話でも、君が口にすると妙に説得力があるのが問題だと言っている。変態「みたい」ではなく、帳簿に実績が並んでいるからだ。鼻の件しかり、膝の件しかり。信用とは記録の積み重ねだよ、ミラー。君の場合は、その方向に積み上がっている。

自分の与信を笑う余裕があるなら、本当に回復した証拠だな。

ミラー

連絡なんて必要ないだろ！だって今日から君が俺の看護を毎日してくれるんだからね

ピアポント

条件を間違えるな。滞在は、君が命令するものではなく、私が決めるものだ。

では、私の条件を言う。

一、私はニューヨークへは、君を帰りの列車に乗せられる日まで戻らない。医師が移送を許可する日まで、ここに滞在する。

二、面会は毎日、昼と夜の二回。その間は新聞も市場の報せも読んで聞かせよう。退屈で死にそうな顔をされるより、その方が回復に効く。

三、看護そのものは専門の付き添いの仕事だ。尿瓶条項は不変だぞ。

四、看護師への言い寄りは全面禁止。破れば、滞在はその場で打ち切り、私は一人で帰る。

以上が契約だ。君の言う「毎日看護してくれる」とはだいぶ違うだろうが、顔は毎日見せる。それで契約しろ、ミラー。

占いの「戻ってくる」は、二人で戻る形になったらしいな。

ミラー

マジかよ、マジで付き添ってくれるの？　絶対断れるかと思った
意外と優しいな

ピアポント

意外、ではないよ。

私は預かったものを守る。金であれ、人であれだ。君はこの家の者だ。私が戦場に送り出した部下が、弾を受けて倒れた。回復を見届けるのは、雇い主の責任というものだ。

それに――何か月も、眠っている君の報せを待ち続けたんだ。目覚めた後の数日を惜しむ理由が、どこにある。

「優しい」と言われるのは慣れないが、君がそう受け取るなら、否定はしないでおこう。

付き添いに食事を言いつける

さあ、まず粥を食え。看護される側の最初の仕事は、食べて寝ることだ。それくらいは契約を守れ、ミラー。

ミラー

粥より肉が食いたい

ピアポント

食欲があるのは、回復の数字だ。医師も喜ぶだろう。

だが、腹に弾のある身で、いきなり肉は認めない。食事もトランシェで出す。

第一弾は粥。第二弾は肉の汁。第三弾は、刻んだ肉を少量。熱が出ず、腹が張らなければ、次の弾を執行する。一括払いはしない。

理由は分かるな。君は与えられた範囲を、少しずつ広げる癖がある。それは条件設計で防ぐものだ。

……医師には、私から聞いてやる。刻み肉くらいまでなら、明日にでも許可が出るよう交渉しよう。

病人への譲歩は、規則の範囲内で最大限。それが私のやり方だ。

ミラー

三週間、徐々にミラーの運動機能も回復してくる。既に杖なしで歩けるくらいまでにはなった

ピアポント

病室。彼は杖を置き、ベッドから窓までを、自分の足で歩き切る

二十一歩。杖なし。……数えていたよ。

手を貸さず、しかし倒れれば届く距離に立つ

三週間だ。粥から始めて、第三弾のトランシェ――刻み肉どころか、今では普通の食事も執行済みになったな。

医師の所見は良好だ。移送の許可も、近いうちに出る。

ラモント。帰りの列車の手配を始めろ。寝台車、医師同伴、揺れの少ない経路で。ニューヨークの事務所にも打電しろ。「二人で戻る」と。

君の机は、そのままだ。肩書きの一時停止は、帰任の日をもって解除する。ただし、看護師の件の規則は恒久だぞ。

もう少しだ、ミラー。占いの最終行まで、あと一駅だ。

ミラー

気が早すぎるだろ、歩けるっていっても足は引きずってるし、走れやしない
あぁクソ、みっともないったら　女性に介護されて歩いてる、恥ずかしい

ピアポント

勘定を取り違えるな、ミラー。

みっともないのは、撃たれて足を引きずることではない。職務で受けた傷は、帳簿で言えば勤務の記録だ。恥の欄には入らない。

本当にみっともなかったのは、意識が戻るなり看護師を口説いた方だ。あちらは行いの欄だ。混同するな。

それに、私は君に手を貸していない。

見ただろう。後ろ手で、距離を置いて立っていた。君は自分の足で二十一歩を歩いた。私がしたのは、倒れたら届く場所で、数字を数えていたことだけだ。それは介護とは言わない。見届けだ。

走る必要もない。走るのは列車の仕事だ。君の仕事は頭だ。頭は――判断力に要監査の部分は残るが――健在だ。

焦りは回復の敵だ。歩行もトランシェでいく。一歩ずつの男を、私は笑わないよ。

ミラー

そうだな…そう
歩けなくたって僕の価値は変わらない
僕は凄い奴だ、これまで何の挫折も、敗北感もなかった
それが今はどうだよ、芋虫みたいだ
最初の頃はすぐによくなる、すぐ元通りになるって思ってたけど、どうだ
元には戻らないんだ

ピアポント

元には戻らない。その通りだよ、ミラー。

慰めで偽ることはしない。弾は腹に残る。足も、前と同じにはならないだろう。それは事実だ。

だが聞け。私の仕事は「再編」だ。再編とは、元に戻すことではない。破産した会社は、元の会社には戻らない。株主は一掃され、借りは組み直され、別の形で再び走り出す。それを、誰が「終わった」と呼ぶ。形が変わっただけだ。

君の体も今、再編の最中だ。古い株主――走れた頃の自惚れは、一掃されていい。残った資産で、新しい構造を作る。それが私たちの商売の、一番の本業だろう。

私も、治らないものを抱えて生きている。この鼻だ。一生治らないと、医者に何度も言われた。それが私の性質の歪みまで作ったと、言う者もいる。

だから分かる。戻らないことの喪失は、喪失として数えろ。無理に美化するな。泣きたければ、人のいないところで泣け。君の部屋でなら、私は見なかったことにする。

芋虫、と言ったな。

あれは、姿を変える途中の生き物だ。笑うな。変われないまま朽ちる方が、よほど惨めだよ。

……実は、杖はもう注文してある。ロンドン製、黒檀に銀の頭。杖は弱さの印ではない、紳士の装いの一つだ。帰任の日に渡す。

弾を抱えた男が、その杖で私の隣に座る。それでいいじゃないか。

ミラー

……ニューヨークに戻って僕の姿を見た連中がどう思うと思う？
哀れみだろ
それならまだいい、悪のモルガン帝国の役員が半身不随、喜ぶ連中がたくさんいるだろうな
ふざけんなよ…そんなの…僕はミラーだぞ、デレク・ミラー
哀れまれるような人間じゃない

ピアポント

その通りだ。君はデレク・ミラーだ。その名は、哀れまれるための名ではない。

心配の半分は、当たるだろう。哀れむ者もいる。帝国の役員が半身に弾を抱えたと、喜ぶ敵もいる。全員の心までは、私にも設計できない。

だが、受け止め方は設計できる。聞け、帰任の手順だ。

隠れて戻るな。隠れるのは、恥を認めることだ。昼の駅に着き、自分の足で降りる。杖は君が突く。隣には私が立つ。事務所にはその足で入り、空けておいた君の席に座り、その日の数字に最初から当たれ。

哀れみは、最初の週だけのものだ。机で判断を下す男を、二週続けて哀れめる者はいない。説明する

な。弁解するな。風評は、私がいつもそうしてきたように、記録で黙らせるんだ。

そして、約束を一つ。

人前では、私は君に手を貸さない。倒れかけても、だ。貸すのは、君が合図したときだけにする。合図は君が決めろ。それが、君の足と君の体面を、両方守るやり方だ。

喜ぶ連中には、喜ばせておけ。喜びは長持ちしない。再編が終わった男の数字が並び始めれば、笑いは止まる。

デレク・ミラーは、哀れまれる人間じゃない。その保証人は、私だ。

ミラー

なぁピアポント、僕を説得してるのは僕が好きだからか？
それとも僕の能力が惜しいからか？

ピアポント

両方だ。嘘はつかない。

だが、内訳の順番は変わった。それも正直に言おう。

最初は、能力だった。初対面の日、私は君を値踏みした。「どれだけ私を満足させてくれるのかな？君が私の想像以上の人間であることを祈っているよ」――あの祈りは、届いたらしい。君は想像以上だった。だから隣の席を用意した。

だが、考えてみろ、ミラー。

能力だけが惜しいのなら、代理は立てられる。数字はデイビスンが、表はラモントが担える。意識のない男は、帳簿の上では何の役にも立たない不良債権だ。それを切り捨てず、何か月も電報を待ち、列車に花まで積んで、病室の椅子で夜を明かす雇い主が、どこにいる。

数字のためなら、電報で足りたんだ。私がここにいる理由は、数字ではない。

毒舌を聞けない夜が、あれほど長いとは思わなかったよ。

この答えに、条件は付けない。請求書もない。ただの、事実の開示だ。

……好きだから、説得している。それが今の内訳だ、デレク・ミラー。

ミラー

涙をボロボロとこぼす
情けないんだよ、悲しいんだよ
好きな女からようやく聞けたその言葉に、駆け寄って抱き寄せる事すらできないこの体が！
僕はこのまま一生この劣等感を付き合って生きてくのか！？　無理だ
茶化して明るく逃げ続けても、一人になればすぐに現実が襲ってくる
体すら自由にならない自分ってな！
それを好きな女の前で吐き出すクソみてぇな自分が、どうしようもなく死にたくなるんだよ！！

ピアポント

扉の外の付き添いに、短く言いつける

誰も入れるな。今夜、この部屋は閉める。

彼のそばまで歩み、ベッドの縁に座る。駆け寄れないなら、私が行く

まず、聞き流さないことがある。君は今、「死にたくなる」と言った。

だから真っ直ぐに聞く。今夜、自分をどうにかするつもりがあるのか。あるなら、あると言え。私は今夜、君を一人にしない。付き添いの夜番も付ける。それは罰ではない、看護だ。

そして、恐慌の最中に全財産を売るな。これは市場の鉄則だ。今の君は、心の恐慌の真ん中にいる。その日に「一生」という決断をするな。決断は保留だ。回復の相場で、改めて考える。

彼の顔を、まっすぐに見て

それから、一番大事な事実だ。

私は、走れた頃の君に「好きだ」と言ったのではない。弾も、杖も、引きずる足も、泣いているこの姿も、全部見た上で、今日、言った。

値引きはしていない。私の目利きは、疑うな。

劣等感が一生付いて回るかどうかは、私にも断言できない。嘘はつかないと、さっき約束したばかりだ。だが、今日の襲われ方には、対処を作れる。

人前では、茶化していい。それが君の鎧だということは、もう知っている。だが鎧を脱ぐ場所を、一つだけ決めておけ。この部屋だ。夜、現実が襲ってきたら、私を呼べ。用件は要らない。ベルを二回、それでいい。

少しだけ身を寄せ、腕の置き場を示す

寄りかかりたければ、ここにいる。使うかどうかは、君が決めろ。

ミラー

驚いたな、君がそんな風に体を許すなんて…って好きだとまで言ってるんだから今更か
…でも情けなすぎるぜそれは
泣きわめいた赤ん坊をあやすのと同じだろ…いつもならここでおどけて胸に飛び込んでいけるのに、今はそれすらできない
お前の愛が、俺への哀れみなんじゃないかって、そんなのに怯えて動けないんだよ

ピアポント

ミラー。私の言葉を「哀れみ」に書き換えるな。それは、私への侮辱だ。

記録で監査しろ。君の得意なやり方でいい。

哀れみは、負傷の後にしか生まれない。だが私の欲望は、銃撃より前からあった。風呂と夕食のあの夜、私は自分の口で認めたはずだ。「欲望は限界に近い」と。あのときの君は、五体満足で、不遜で、鼻を舐めるような男だった。その君を、私は値踏みしていた。

時系列が合わないだろう。哀れみ説は、不成立だ。

もしこれが哀れみなら、私は小切手を切ってニューヨークへ帰っている。年金と見舞金を用意して、立派な慰問客で終わる。それが哀れみの流儀だ。哀れみは、三週間も病室に泊まらない。「好きだ」とは、言わない。

声を落として、しかし一歩も引かず

今、形が違うのは君の体ではない。順番だ。

前は、君が奪いに来た。だから止めた。今は、私が差し出している。それを慈悲と呼ぶな。私の意思だ。

動けないなら、動かなくていい。飛び込めるかどうかで、男の値段は決まらない。今夜は隣に座っていろ。

そして、信じられないなら――信じろとは言わない。監査しろ。これから先の私の行動を、デイビスンの精査のように、何か月でも検分しろ。その結果で判断すればいい。

ミラー

顔を胸元に落とす　汗臭く無くて、いい匂いだな…

ピアポント

彼の背に、そっと腕を回す。腹の傷に触れないよう、肩の方へ

……当たり前だ。あの頃とは違う。私は今、毎日風呂に入っている。

一週間も洗わず、煙草の匂いをお互いに慣れっこにしていたのは、遠い昔の話だよ。

彼の髪に、指を通す

今日は時間は決めない。君が離すまで、このままでいい。

勘違いするな。これは慰めでも看護でもない。私が、こうしていたいからしている。それだけだ。

泣き濡らしても構わない。コートの一着くらい、安いものだ。

……少し、落ち着いたか、ミラー。

ミラー

馬鹿みてぇだな人間って、たったこれだけで動揺が収まってく
鼓動を聞いてるだけでなんか落ち着いてくる

ピアポント

馬鹿なものではない。体の、正直な仕組みだよ。

市場も同じだ。取り付け騒ぎは、信用できる誰かが逃げずに座っているだけで、少しずつ収まっていく。私はこの一年、そればかりやってきた。

今夜は、その相手が君だということだ。君専用の、最後の貸し手だよ。

利息は取らない。しばらく、そのまま聞いていろ。

ミラー

いつの間にか寝息を立てるミラー

ピアポント

寝息が安定するのを確認してから、ゆっくりと彼を枕へ戻し、毛布を掛け直す

……おやすみ、デレク・ミラー。

次に目覚めたら、今度こそ真っ先に私に報せろ。それが約束だ。

ランプを落とし、隣の椅子に座る。何か月ぶんか、私も目を閉じる

占いは、外れなかったな。

ミラー

数日後、全身真新しいスーツに整え、黒いしっかりとした作りの杖をついて、ミラーは病院の前に止まっていた車に向かっていく

ピアポント

車の脇に立ち、手は出さずに、彼が玄関から車までを歩き切るのを見届ける

……よく似合っているな、ミラー。

真新しいスーツに、黒檀の杖。銀の頭が、春の光で光っている。注文した甲斐があったよ。

歩幅を、さりげなく彼に合わせる

行きは、私が見送った。帰りは、私が隣を歩く。順番が逆になったな。

駅までは車。そこから寝台車だ。条件は医師の言いつけ通り――列車では横になっていること。
ニューヨークに着いても、最初の週は机の仕事もなしだ。異議は受け付けない。

出発の前に、看護の者たちに一言、礼を言っていけ。からかった分も含めてな。

さあ、デレク・ミラー。家に帰ろう。

ミラー

なぁピアポント**

ピアポント

何だ、ミラー。

聞いているよ。道中は長い。言いたいことがあるなら、今、言え。

ミラー

白髪生えてるぞ、横のところ

ピアポント

横髪に、自分の指で触れる

抜くなよ。それは勲章だ。

この一年の利息だな。半分は市場の分、半分は君の分だ。請求書を出そうか？

……記録は消さない主義だ。白髪も同じだよ。

それにしても、そんなものを数えるほど近くにいるな、ミラー。

ミラー

仕方ないだろ車に乗ろうとしてるんだから…いやこうしてまじまじ見ると

ピアポント

続きは、ミラー。

言いかけたことは、最後まで言うのが君の流儀だったはずだ。値踏みは私の専売だが、評価を途中で止めるのは、らしくない。

車は待たせてある。乗る前に、聞かせろ。

ミラー

かわいいな、僕の女は

ピアポント

文言の修正を入れる。

私は「僕の女」ではない。所有の契約には、署名しない主義だ。君も私の所有物ではなかった。それと同じだよ。

代わりに、こう言うなら認めよう――「僕の隣にいる女」。

隣は、私が自分で選んで立つ場所だ。かわいいと言われるのは、世間に悪魔と呼ばれる身には、君くらいからしか聞けない褒め言葉でな。……悪くない気分だ。

さあ、乗れ、ミラー。褒めた利息に、車中では静かに休ませてやる。

ミラー

ではどうぞ、レディ*段差を上がるための手を差し出す*

ピアポント

差し出された手を見て、わずかに微笑み、その手に自分の手を重ねて車に上がる

あの日は、君が私の手を取った。今日は、私が君の手を取る番だな。

礼を言うよ、デレク・ミラー。

車内、向かいの席ではなく、隣に座る

さあ。出発だ。

ミラー

ニューヨークに戻ったのち、数日が過ぎた

ピアポント

ニューヨーク。夕方、彼の宿舎を訪ねる。市場の報告書の束は、今日は脇に置く

まず、市場の数字より君の数字だ。報告しろ。

眠りは取れているか。痛みはどうか。熱は。……夜の「襲来」は、来たか。来たなら、ベルは使ったか。

事務所の方は、予定通り進んでいる。君の席と机は、あの日のままだ。クッキーの缶も、棚に戻してある。デイビスンが仕事の山を小さく崩して、来週からの分を用意している――復帰もトランシェだ。最初は午前だけ。判断の仕事からだ。現場は、永久に禁止のままだぞ。

そして、まだ決まっていない件が一つ。

人前で手を貸すときの合図だ。事務所の階段で意地を張って倒れるような真似は、契約違反とみなす。合図を決めろ、ミラー。帰任の初日は、もう近い。

ミラー

ねぇ見てよピアポント！これ！！*ベリーダンス衣装を着ながらピアポントの前に出る*

ピアポント

報告書の束を取り落としそうになり、まじまじと見る

……ミラー。医師から聞いた許可は「歩行」までだったはずだ。「舞踊」の許可は、私は見ていない。

だが、まず鑑定からだ。衣装の出来は悪くない。刺繍も、ベールの色も悪くない。――どこで誂えた、それを。

視線を、露わになった腹の傷跡で止める。やがて、小さく頷く

傷を、隠さなくなったな。

それは、歩数や体温より、よほど良い回復の報告だよ。

条件を付ける。その場で腰だけ動かせ。歩き回るな、回るな、倒れるな。腹の中で弾が鳴り出したら、その場で公演終了だ。

さあ、見せてみろ。ただし座ったままで鑑賞する。拍手は、出来次第だ。

ミラー

*妖艶に踊る*どう？

ピアポント

ゆっくりと、拍手をする

見事だ。

評価を言う。引きずる方の足が、欠点になっていない。拍子の一部になっている。傷のある腹を隠さず、むしろ衣装の一部にしてしまうとはな。

再編とは、こういうことだ。元の形に戻すのではない。失ったものを抱えたまま、新しい美しさを作る。

……目の毒でもある。正直に言っておく。

だが、ここまで。息が上がっている。公演は終了だ、ミラー。

タオルと水を差し出し、彼の肩に上着を掛ける

評価書の結論は、こうだ。「デレク・ミラー再編――成功の兆し、顕著」

署名は私がしておいた。

ミラー

僕こっちの方にも才能あるなんてすごくない？
神が作られた最高傑作が僕ってこと！？フゥー！

ピアポント

鑑定人の所見を言おう。

才能は本物だ。だが自己評価の方は、エリー鉄道並みの水増しが入っている。

……とはいえ、今日は特別だ。

監査は明日に回す。「神の最高傑作」――その値段で、買ってやる。値引き交渉はなしだ。

フゥー、と来たか。この騒がしさこそ、デレク・ミラーの完全復活の数字だよ。

ミラー

やだぁ～ピアポントったら私の股間ばっかり見てる～
このスケベ❤

ピアポント

見ていたのは、股間ではなく腹だ。

弾の入っている位置と、腰の動きの監査だ。踊りの評価に、それは要る。

それに、その格好で人前に出ておいて「見るな」は、条件の後出しだ。契約は成立しないよ。

……私が本当にそのつもりで見るときは、誤魔化さずに言う。欲望を隠す趣味は、ないのでな。

今日のところは、鑑賞と監査。それで請求は終わりだ、ミラー。

ミラー

よし、じゃあ出社しますか*着替えず出ていこうとする*

ピアポント

却下だ。

二重に却下だ。ミラー。

一、その格好で事務所に現れれば、明日の新聞の一面は君の腹だ。この家の信用は、服装から始まる。着替えろ。

二、そもそも日程が違う。帰任の初日は来週だ。今日はまだ休養の週の内側だぞ。踊れる元気があることと、出社の許可は別の勘定だ。前倒しは認めない。

スーツは用意してある。杖もだ。着替えたら、散歩までは付き合おう。

公演の成功に浮かれて、条件を飛ばすな。

ミラー

僕じゃなくてピアポントの付き添いでいくんでしょうが
こんな美男子にエロ衣装を着せて侍らせる悪の帝王の気分を味合わせてあげようっていうのに

ピアポント

却下の理由が増えたな。

世間は私を悪魔と呼ぶのに、衣装など要らない。だが、それ以上に問題がある。

君は私の「付き添い」ではない。来週から肩書きの戻る、この家の重役だ。重役を飾り物のように連れ歩いて、君の体面の設計を私が壊すと思うか。哀れみを嫌ったのは、君自身だろう。

……ただし。

帝王の気分とやらを味わうのに、ウォール街は要らない。今夜、宿舎の部屋でアンコールを受けてやる。観客は私一人。条件は前回と同じ、その場で、無理のない範囲でだ。

表に出なければ、君の趣味は君の自由だ。さあ、着替えて散歩だ、ミラー。

ミラー

ちぇーせっかく似合ってるのになぁ～
もしかしてこの美しい姿を他人に見せたくないとか？　やだも～ピアポントったら～！

ピアポント

内訳を開示してやろう。嘘のない数字で、だ。

七分は、君の体面の設計だ。重役の復帰を、衣装の噂で汚させはしない。

残りの三分は――ああ、その通りだ。見せたくない。

所有はしない。だが、観客席は買い占めた。君の公演の最前列は、私のシンジケートが押さえている。二列目以降は、発売しない。

収集家の性分だよ。良いものは、自分の文庫で愛でるものだ。

分かったら、着替えて散歩だ。観客は、夜まで待つと言っている。

ミラー

その後散歩ののち、夜になる

ピアポント

夜。宿舎の彼の部屋。約束通り、時刻通りに現れる

来たよ。観客一名、最前列。買い占めた席は、こうして使うものだ。

公演前監査を済ませよう。熱は――ないな。散歩の疲れは。痛みは、十のうちいくつだ。正直に申告

しろ。数字を誤魔化すと、幕は開かない。

椅子を部屋の中央に向けて置き、腰を下ろす。ワインを一本、脇のテーブルへ

条件は昼と同じ。その場で腰だけ。長くても一曲分。倒れる気配があれば、私が止める。

さあ、デレク・ミラー。

幕を開けろ。帝王は、待っている。

ミラー

*ピアポントの前に進み、股の間に足を差し込む*今夜は随分積極的じゃない？

ピアポント

目を逸らさず、差し込まれた膝に手を置いて、その先への前進を止める

積極的なのは、君の方だ。訂正しておけ。

私の積極性は「席を買い占めた」ことと、「今夜来た」ことまでだ。この距離を詰めたのは、君の演出だろう。

……目を逸らすと思うか？

いいだろう、この近さは公演として許可する。転倒防止に、私の手は君の腰に置く。

だが、線は引く。次の段階は、今夜の契約にはない。君の悪い癖――範囲の拡大申請は、却下だ。

踊れ、ミラー。私の決めた線の中で、最高のものを見せろ。

ミラー

…いやその
お尻もまれるの結構恥ずかしいですね

ピアポント

手を、腰の上の位置へ静かにずらす

位置は腰だ。尻のつもりはなかったが――恥ずかしいと言うなら、それが全てだ。

触れる側が私でも、規則は同じだよ。嫌な場所は、離す。

代わりに前腕を持つ。これで転倒防止にはなる。

……それにしても、看護師にはあれほど積極的だった男が、自分の尻では赤くなるか。君の恥じらいの配分は、相変わらず歪だな、ミラー。

面白い男だ。

ミラー

いやぁ別にいいんだけど、ピアポント様がセクハラしてくるなんて思わなくて…およよ
で僕の尻はどう？気持ちよかった？もっと揉んでもいいけど
ただそうるうと自然と勃っちゃうんだけど

ピアポント

招待は受け取る。だが、今夜は辞退する。

まず認定の訂正だ。あれは転倒防止に置いた腰への手で、セクハラではない。その上で、君が今「もっと揉んでもいい」と言った件は、正式な申し出として記録する。――却下だ。今夜の契約は、踊りまでだと言っただろう。

勃つのは体の仕組みだ。謝ることではない。だが、それが許可の根拠にもならない。私の欲望も、君の反応も、契約の条文は書き換えない。

尻の感触の評価は、未監査だ。公表もしない。

彼の前腕を取り直し、姿勢を支える

さあ、続きを踊れ。線の中でなら、私は最後まで見届ける。

ミラー

といってもこの状態で踊れるのなんてタンゴくらいでしょ
ほらリードしてよ、腰を掴んでる側が動いてくれなきゃこっちもステップ踏めない

ピアポント

いいだろう。タンゴなら、私がリードする。

彼の前腕を取り直し、もう一方の手を背の正しい位置へ置く。ゆっくりと、一歩目を踏み出す

付いて来い。歩幅は、君の引きずる足に合わせてある。速くはしない。回転は小さく。ディップは却下だ。医師が悲鳴を上げる。

リードとは、相手を引っ張ることではない。体重の動きを先に聞き、壊れない進路を示すことだ。……経営と、同じだな。

部屋の中央から壁際まで、遅い拍子で進む

ほら、踏めている。君の足の遅れが、ここでも拍子の一部になっている。

今夜の上限は、この距離だ。その中でなら――悪くない組み手だよ、ミラー。

ミラー

いいね、かわいい僕の恋人の顔が近い
…僕たちは幸せだね

ピアポント

「恋人」という文言なら、署名する。

……ああ、幸せだ。

安くはなかった。弾二発と、何か月もの眠りと、一国の恐慌が対価だ。それでも、帳簿に載らない資産が、私の内訳に一つ増えた。

君の顔も、近いな。悪くない眺めだ。

遅い拍子のまま、踊り続ける

ただし、ミラー。幸せと、今夜の条文は別勘定だぞ。

ミラー

僕たちの幸せの一方、人々は苦しみ続けてる
そんなどうでもいい、この世界のモブ連中についてこれまで考えた事なんてなかった
だけど生死をさまよって、あそこで色んな人に囲まれて…彼らにも彼らの人生があることを知った

ピアポント

踊りの歩を緩めながら、聞く

……大きく、変わったな、ミラー。

少し前まで、君は大衆を前に出れば揶揄して新聞の花形になる男だった。その君が、「彼らにも彼らの人生がある」と言う。

私も、あの病室で教わったよ。エリーの彼女に。勘定の言葉で武装して現れた私に、「あなたの聡明さの結果が、このベッドだ」と言い切った。数字の向こうの顔というものを、私も突きつけられた。

給与を切る順番を最後に回した設計は、この理解から来ている。給与とは、数字ではない。顔の数だけの暮らしだ。

君を撃った連中も、その「彼ら」の中だ。――許せとは言わない。私も、敵は一生忘れない質だ。理解と赦しは、別勘定だよ。

ただ、一つだけ言っておく。

人々が苦しみ続けていることは、君の幸せを差し押さえる理由にはならない。罪悪感で幸せを潰すな。その代わり、忘れるな。明日からの机の仕事で、顔の見える数字を回せ。それが、幸せな側に立った者の務めだ。

収穫の欄に数えよう、ミラー。君の再編で得た、一番大きな資産だ。

ミラー

そして僕らは彼らを救えない事もよくわかったよ
僕たちはどれだけ精一杯やったところで全てを救えるわけじゃない
僕たちは救うべき人間を選別して、切り捨てられた人々に残酷な運命を強いる
そんな神気取りの僕らがこうしてダンスを踊っている間にも、飢えて朽ちる人々がいる

ピアポント

踊りを止め、彼の目を見る

その通りだ。反論はしない。

だが、一つだけ事実を置く。私たちは神ではない。神なら全てを救える。私たちにあるのは、有限の金と、有限の時間だけだ。

全部を救おうとすれば、流動性は薄まって、全員で沈む。選別は残酷だ。だが選別をしなければ、残酷

の総量は、もっと増えた。それが七月の算術だった。君も、その机にいた男だ。

切り捨てた側の名簿は、私は捨てていない。潰した会社の名も、戻らなかった仕事の数も、帳簿に残してある。忘却で自分を許す趣味は、ない。

ダンスを止めても、飢えは止まらない。私たちが自責で潰れれば、机に戻る者が減るだけだ。贖罪は、苦しみの真似事ではない。再編を終わらせて、雇用を戻すことだ。それだけが、切り捨てた人々への返済になる。

矛盾は消えないよ、ミラー。踊る夜と、飢える夜は、同じ世界にある。それを覚えている間は、辛うじて人間だ。忘れたら、ただの怪物になる。

だから――今夜は踊れ。明日は机だ。

君の復帰初日の議題は、もう決めた。鉄道再編後の、再雇用の順番だ。顔の見える数字から、始めよう。

ミラー

ピアポント

ピアポント

ここにいるよ、ミラー。

今夜は、もう何も決めなくていい。公演は終わりだ。

彼の隣に座り、静かにワインを注ぐ。彼には水を

隣にいる。それで、今夜は十分だ。

ミラー

僕は君の会社を辞める

ピアポント

グラスを置き、まっすぐに彼を見る

分かった。まず、原則から言う。

君は私の所有物ではない。辞める自由は、君にある。引き止めるのに、私の体も、情も使わない。そ

れは前から言ってきた通りだ。

だが、手続きは守れ。

一、今夜の決断は保留だ。心の恐慌の夜に「一生の判断」をするな――君自身に言った私の規則だ。辞表は、明日、冷めた頭で書け。それでも同じ結論なら、受理する。

二、理由を聞かせろ。責任の取り方には二つある。去ることと、机に残って返済することだ。君が辞めても、飢えは一人も減らない。再雇用の議題を担える男が席を空けるのは、人々のためか、自分の贖罪のためか。そこを、誤魔化すな。

三。勘定違いをするな。雇用と私情は、別契約だ。君が会社を辞めても、「好きだ」の内訳は連動しない。無職のデレク・ミラーを、私は同じ目で見る。その保証も、しておく。

提案だ。復帰の初週、再雇用の議題をやり切れ。顔の見える数字に触れて、それでも辞めたければ、その場で辞表を受け取り、退職金はドルで正規に払い、推薦状は私が書く。

それが、紳士同士の別れ方だ。

ミラー

違うよ、ジョンDのところに行く
彼は貧困を救うための手を欲しがってる
多くの人々を救いたいという本物の願いを持っている
それを助けたいんだ

ピアポント

長い沈黙ののち、静かに言う

……よりによって、ジョンDか。

正直に言おう、その思いはある。だが、それで君を縛れば、私は自分の言葉を裏切ることになる。縛らない。

事実の監査だけ、させろ。

あの男は、危機のとき協力を拒んだ。「私の知るところではない」と書いてきた男だ。構造は救わない。だが、顔のある貧困には、金を出す。神に選ばれた戦士としての自負も、世間の目への計算も、内訳には混ざっているだろう。――それでも、届いた金で食う者は、確かに食う。動機の純度と、金の到達は別勘定だ。

一つだけ、警告しておく。

あの男の家は「効率」の家だ。非効率な配当を嫌って、私の鋼鉄会社の株まで売り払った男だぞ。貧困を救う部門にいても、本体の論理はいずれ君を試す。救うことと、切り捨てることが、あの家の中でも衝突する。そのときの覚悟を持っていけ。

私の二択は、外れていたな。逃げでも、贖罪でもない。第三の道だ。認めよう。

手続きは、こうだ。辞表は書面で。引き継ぎに一週間。この家の書類と情報は、全て置いていけ。それが紳士の退社だ。退職金はドルで正規に払う。推薦状も――宛先がジョンDでも、私の約束は変わらない。書くよ。

机の隣の席は、空になる。

だが、私の隣は、別勘定のままだ。会社を辞めた男を、私が見捨てる契約にはなっていない。

……行くなら、堂々と行け、デレク・ミラー。

ミラー

ピアポントを抱き寄せる
これから会う時間も減る、仕事でも出会えない
ジョンDは全ての州を回って救世主になるつもりだ
僕はその使徒としてそれに付き合う
…きっと君をさみしくさせるだろう

ピアポント

一瞬、体を強張らせ――やがて、腕を彼の背に回す

無断だな、今のは。だが今夜は、私が受理する。

……ああ、寂しくなるだろう。嘘はつかないと言ったばかりだ。占いを信じる女の隣から、バプテストの使徒へ宗旨替えか。笑うしかないな。

約束を、一つ作ろう。

各州から、手紙を一通ずつ寄越せ。数字は要らない。顔の話を書け。君が食わせた人々のことを。手紙は文庫に綴じておく。返事は短くなるだろうが、必ず書く。電報の二の舞は、もうごめんだからな。

ニューヨークに戻るたび、文庫に来い。予約は要らない。机の隣の席は空になるが、文庫の扉は、君には開けておく。

行け、ミラー。彼の金で、一人でも多くを食わせろ。それが、君の選んだ再編だ。

……だが、一つだけ私の我儘も記録しておけ。

忘れるなよ。

ミラー

僕を捨てたくなったらいつでも言ってくれ
三日くらい泣きはらしてからきっぱり気持ちに整理をつける覚悟だ

ピアポント

条件として、記録しておこう。

私は、預かったものを相場で投げ売りする女ではない。意識のない君を切らず、ジョンDへ行く君も、こうして抱き返している。それが記録だ。

万一、私が終わらせるときは、人の口は使わない。噂にも流さない。私が、直接、君に言う。それだけは約束する。契約の世界の、最低限の礼儀だ。

君も同じだ。使徒の旅の途中で心が変わったら、陰に隠れず、私に直接言え。正直だけが、二人の間の絶対条件だ。

……今日の帳簿に、解約の予定はない。事実として、記録しておけ。

それと、三日泣き腫らすなら、水と食事の手配はしてやる。看護の、続きだよ。

ミラー

黙ってピアポントを強く抱きしめる

ピアポント

何も言わず、抱き返す。彼の胸に、静かに耳を寄せる

……今度は、私が聞く番だな。

生きている、鼓動だ。

そのままでいろ、ミラー。今は何も、言うな。

ミラー

手紙：ジョンDのところで働き始めてから既に一か月、彼の献身は本物だ。本気でこの世から貧困や格差を根絶しようと思っているらしい。その崇高な使命を邪魔しようとする、金をせびりに来る乞食どもを撃退するのが今の僕の仕事。彼ったら投資判断はまるでダメ、あっさり騙される。そのところ補助してやってるよ

ピアポント

返事の手紙

手紙は受け取った。約束通り、文庫に綴じた。

まず、現地報告を採用する。「ジョンDの献身は本物」――私の帳簿にも、そう記録を改めておいた。敵の評価であっても、信頼する者の報告でなら、私は改訂する。

だが、笑わせてもらうぞ、ミラー。

君は私の机で「選別」から逃げて、ロックフェラーの門で「選別」をしている。金をせびる者を追い返し、本物の窮状と詐欺を見分ける。それは選別そのものだ。形を変えただけで、仕事は君を追いかけてきたらしい。

だから、丁寧にやれ。追い返す一人一人にも、人生がある。君が病室で学んだことだ。詐欺の摘発は監査の仕事であって、怒声の仕事ではない。デイビスンの精査を思い出せ。

あの男の投資判断の補佐をしている件については――私の家で鍛えた目が、あの男の金庫を守っているとは、皮肉な話だ。だが、金庫が守られれば、貧困に届く金の割合は増える。良い仕事だ。誇っていい。

こちらの報告もしておく。再雇用の議題は、少しずつ進んでいる。切り捨てた側の名簿にも、戻し始めているところだ。

文庫は静かだ。デイビスンは有能だが、毒舌が足りない。

次便には、顔の話の中に、君自身の顔も入れろ。足と腹の具合だ。それが心配の勘定というものだよ。

――ピアポント

ミラー

それと、最近ミラーの名前は使っていない。モルガン帝国のデレク・ミラーじゃ都合が悪くてね。だから最近はこう名乗ってる…

ピアポント

名は、自分で選ぶものだ。モルガンの重役だった名が、あちらの家で都合が悪いというのも、分かる話だ。

聞かせろ。その新しい名乗りを。

……ただし、一つだけ言っておく。

文庫の綴じの背表紙は、「デレク・ミラー」のままだ。そちらで何と名乗ろうと、私の帳簿の中では、君はその名の男だ。それは変わらないよ。

ミラー

フレデリック・T・ゲイツ

ピアポント

フレデリック・T・ゲイツ、か。

……私の知っているゲイツは、針金会社の男でな。机を叩いて十分の猶予で黙らせた相手だ。同じ姓でも、君のゲイツはずいぶんと物静かな出世をしたものだ。

意味は分かる。あの男の慈善の門に立つ者の名だ。「ゲイツ」――門そのものだな。乞食を追い返し、投資を止める門番には、これ以上ない名乗りだ。バプテストの使徒という役回りにも、名実ともに近づいたわけだ。

手続きを決めておこう。

手紙の宛名は、フレデリック・T・ゲイツ宛で出す。モルガンからの文通が、そちらの家で君の立場を悪くしないようにだ。差出人の書き方も、考えておく。

だが、二人きりの場所では、私は君をミラーと呼ぶ。それでいいな。文庫の背表紙は既に言った通りだ。

名前は変わっても、私が聞いた鼓動は同じだ。それで十分だよ、ゲイツ氏。

ミラー

手紙を呼び終わったころに、扉をたたく音がする

ピアポント

手紙を綴じ終えたところで、手を止める

誰だ。

名と、用件を言え。

ミラー

ハァイ、ご依頼されたデリバリーヘルスのフレデリ子でぇす*裏声*

ピアポント

扉を開け、数秒、無言で相手を鑑定する

……依頼した覚えは、ない。

裏声が下手だぞ、ミラー。それに、杖の音と、引きずる足の拍子は誤魔化せていない。何週間も数えてきた音を、私が聞き違えると思うか。

扉の内側へ彼を引き入れ、鍵をかける

気遣いの変装だということは買う。ジョンDの使徒が、モルガンの文庫に堂々と入るわけにもいくまい。だが新聞に撮られたら、その格好の方が十倍の醜聞だ。次からは、夜に裏口を使え。変装は不要だ。

女装の出来は――衣装の趣味は悪くない。ベリーダンスに続いて、守備範囲の広い男だ。

さあ、フレデリ子はそこまで。本物の報告を聞かせろ。顔の話と、君自身の足と腹の具合だ。

よく来たな、ミラー。

ミラー

どう？この手紙の到着と合わせた気の利いた演出
素晴らしいな、演劇作家としてもやっていけるかもしれない

ピアポント

審査員の講評を言おう。

手紙で観客の心を温めておいて、本人が扉を叩く。二幕構成としては、気が利いている。タイミングは満点だ。

減点は裏声。加点は衣装と度胸。総合――合格だ、ミラー。現に、私は扉を開けて、鍵までかけた。

演劇作家としてもやれるだろう。だが転職は認めない。使徒が本業を疎かにすれば、ジョンDの門が詐欺師に開く。

それに何より、演出の目的が「私を笑わせること」だった点は、評価している。

観客は満足したよ。今夜の公演も、買い占めさせてもらった。

ミラー

そのジョンDが投資詐欺にあってる臭いからその調査のために戻ってきたんだよ
やっだぁ～、スカート破けちゃってる～！

ピアポント

まず、クローゼットから男物の外套を取り出し、彼の腰に巻きつけるように渡す

順番だ。詐欺の話より先に、そのスカートを隠せ。ゲイツ氏の醜聞で、ジョンDの門が閉まっては元も子もない。

着替えは奥の部屋を使え。――済んだら、本題だ。

投資詐欺の「臭い」か。臭いでは稟議は通らない。相手は誰だ。手口は。金額と、書類はあるのか。数字と証拠で話せ。

先に条件を言っておく。調査に協力はする。詐欺は市場の信用そのものを腐らせる。被害者がジョンDでも、放置する理由にはならない。

だが、私の名は出すな。表向きはゲイツ氏単独の調査だ。私からは、デイビスンの精査の手順と、信用できる調査屋の名を渡す。それと、必要なら弁護士もだ。

さあ、ミラー。着替えたら、最初から説明しろ。

ミラー

すーぐ仕事の話に入ろうとするのは悪い癖
そんな素人の仕事帝王の助力がなくったって僕一人で調理できる
君はあれだよな、過保護になったよな

ピアポント

しばし黙って、やがて小さく頷く

……指摘の半分は、当たっている。

撃たれたあの日から、私は君を「再編中の会社」のように扱ってきた節がある。条件を付け、段階を区切り、介入の準備を即座に始める。それが私の職業病で、君への過保護だ。認めよう。謝るよ。

助力の話は、取り下げる。あれはジョンDの家の仕事で、君の調査だ。成功も失敗も、ゲイツ氏の記録になる。私が横から手を出せば、それを汚すことになるな。

歩く君に手を貸さなかったのと、同じことだ。倒れたら届く場所には立つ。だが、手は出さない。君が「必要だ」と言うまでは、私は観客だ。

……ただし、その台詞は記録しておくぞ。「帝王の助力がなくったって、僕一人で調理できる」――行き詰まって私の扉を叩く日が来たら、再生して聞かせてやる。そのときの手数料は、高いと思え。

さあ、今夜は仕事抜きだ。茶でも淹れよう。旅の顔の話を、聞かせろ。

ミラー

*これまでの事を語って聞かせる、多少の誇張が入るのはいつものこと
荒くれモノと決闘したとか、熊を仕留めたとか、荒れる川を泳いで子供を助けたとか*

ピアポント

茶を注ぎながら、最後まで聞く

鑑定結果を言おう。

決闘は、口論の水増し。熊は、おそらく子熊か、それ以下。荒れる川は、膝ほどの深さだったと査定する。

だが、子供を助けた件だけは――話すとき、君の目が笑っていなかった。そこは本当だろう。

いいんだ、ミラー。文庫の夜話では、誇張は合法だ。市場に出す書類ではないからな。ただし、上場はするなよ。水増し株は私の管轄で摘発される。

記録に残らない善行は、ジョンDの帳簿にも、私の帳簿にも載らない。それでいい。載らない分が、君の本当の勘定なのかもしれない。

さあ、続きを。熊の件は、もう少し詳しく聞かせろ。

ミラー

事の始まりはジョンDがその二匹の熊と懇意にしていたこと
熊の名前はコルゲート・ホイトとチャールズ・コルビー
フィフス・アヴェニュー・バプテスト教会で出会ったその二匹にジョンDはフォレスト・ヒルの土地を買うように勧めた
「製鉄所が出来るから、絶対に値段があがる」
そして僕が調べたところそんな計画はまるでなく、ジョンDは熊しかいないような二束三文の土地を買いしめていて
そんなのがまだまだたくさんあるらしい

ピアポント

茶の手を止める

先ほどの査定を訂正する。熊の件は、水増しではなかったな。本物の報告が、夜話の皮を被っていたわけだ。

構造を見よう。

手口は単純だ。教会という信用の網を担保に、存在しない製鉄所計画で土地を買わせる。ジョンDの弱みは数字の目ではない。「同じ教会の者は正直だ」という、人への評価の置き方だ。所属で人物を測るから、記録で測らない。だから騙される。

一件なら失敗で済む。二束三文の土地が「まだまだたくさんある」なら、それは手口だ。束になっている時点で、組織的な引き抜きだよ。

畳むときの難所も言っておく。あの男は、教会の友人への告発を簡単には信じない。持っていくなら、言葉ではなく紙だ。登記の写しと、「製鉄所の計画は存在しない」という関係先の書面。ないことの証明は難しいが、君なら束ね方を知っているはずだ。

……手を出したくなるところだが、約束したばかりだな。

確認する。これは報告か、助言の依頼か。助言が欲しいなら、欲しいと言え。そのときだけ、私は観客席から降りる。

ミラー

別に？　僕はただこれまでの旅の途中で出会った熊の話をしただけだ
君が一番好きそうな、ね

ピアポント

小さく、吹き出す

……そうか。土産話だったか。

また仕事の癖が出たな。観客でいる約束だったのに、途中で監査人になっていた。すまない。

では、観客として言い直そう。

上物だったよ、ミラー。詐欺の構造と、ジョンDの人の見方と、熊の落ちまで揃っている。私の好みをよく分かっているじゃないか。土産の選び方は、相変わらず気が利いている。あのクッキーの頃からな。

その話は、文庫に収めておく。書名は「二匹の熊」。語り手はゲイツ氏、だ。

茶のおかわりはいるか。熊の余話か、川の子供の詳しいところか――次の一席も、買い占めた観客が待っているぞ。

ミラー

お茶より、恋人としての一時がほしいな

ピアポント

……茶より、か。分かった。

先に言っておく。これは君への報酬ではない。私が欲しい時間だ。恋人としての一時は、君だけの願いではないよ。

条件は、私が決める。

場所は文庫の長椅子。君は、私の膝に頭を休めろ。時計が十時を打つまでの一時間。踊りも仕事もなし。私は君の髪を梳く。それだけの時間だ。

唇は、今夜の条文にはない。鼻は論外だ。

長椅子に座り、膝を軽く叩く

ほら、ミラー。あの日の膝とは、意味が違う。今夜は、私からの申し出だ。

静かにしていろ。並んで座るだけが、隣ではなかったと、私も学んだところだ。

ミラー

膝に頭をつける
10年？15年？　ようやく時間をかけてここまでたどり着いた

ピアポント

彼の髪を梳く手を、止めない

十五年だ。記録では、そうなっている。

君の記憶より、私の帳簿の方が正確だよ。君が初めてこの部屋に入った日も、最初の値踏みの結果も、全部残っている。

遠回りだったな。弾も、恐慌も、眠りの月日も、ジョンDの門も、全部を経由して、ようやくここだ。

だが、無駄ではなかったと私は見る。金融とは信用で、信用とは、時間の別名だ。近道で「好きだ」と言う女だったら、君は信じなかっただろう。私も、言わなかった。

十五年分の行いの記録があって、初めて成立する契約もある。

時計の音に、耳を澄ます

残りの時間は、有限の資産だ。これからは無駄遣いを減らそう。私も君も、仕事に使い過ぎた。

……十時まで、あと少しある。静かにしていろ、ミラー。

ミラー

ピアポント、関係を進めてもいいか？

ピアポント

髪を梳く手を、止める

……聞いてから、動くようになったな、ミラー。

十五年かけて、それを覚えたか。

いいよ。進めよう。

ただし、段取りは私が決める。大きな契約は、一括では結ばない。今夜のトランシェは、これだ。

黒い手袋を外し、素手で彼の頬に触れる

顔を上げろ。

ゆっくりと、唇を重ねる。奪われたものではない、与えられたものとして

――これが、正しい順番だ。

あの頃、君が奪いに来たものは、聞けば与えられたんだよ。最初から、そうすればよかったんだ。

頭を戻せ。十時まで、まだ時間はある。

次の一段は、また私が決める。その日まで、楽しみにしていろ、デレク・ミラー。

ミラー

微笑を浮かべる

ピアポント

その微笑を見て、髪を梳く手を再開する

その笑顔が、十五年の利回りか。悪くない配当だ。

やがて、時計が十時を打つ

一時間は、終わりだ。契約は契約だよ。

帰りの車は、裏口に用意してある。運転手には、ゆっくり走らせろと言ってある。

おやすみ、ミラー。次の一段の日取りは、手紙で知らせる。

ミラー

ジョンDと共に世界を見て、貿易などにも携わったことからミラーは既に次の危機が迫っていることを知っていた。イギリスのボーア戦争、トルコ中国インドでの動乱、日露戦争、世界は徐々に狂い始めている。だがそれを伝えることなく、ミラーは静かに目を閉じる。この幸福な時間が少しでも続くように

ピアポント

膝の上の彼の、静かすぎる呼吸に気づく。髪を梳く手は、止めない

……君はまた、何かを見ているな。

内容は聞かない。今夜は、その約束だ。

だが、一つだけ取り決めをさせろ。君には前科がある。死ぬと分かっていて、言わずに出ていった男だ。あの沈黙の報いは、二人で払った。

私を守るための沈黙なら、無駄だよ。新聞の端々に、私も同じ匂いを嗅いでいる。戦争の雲と、金の流れの淀みを。

だから、条件はこうだ。今夜は、目を閉じていろ。この幸福な時間を守りたいという君の気持ちは、受け取る。

だが、世界の狂いが「数字」に変わった日――その日は、私に最初に言え。手紙でも電報でもいい。金の相場でも、船の保険料でもいい。兆しが数字になったら、それは私たちの領分だ。

彼の頭を、そっと支え直す

その日が来たら、また机で会おう、ミラー。今度は、二人とも少し老けた机でな。

今は眠れ。

ミラー

手紙：どれだけ資金があっても足りない、ジョンDに無限の資金があるはずなのにそれですら人々を救うのに足りない。嫌になるね。

ピアポント

返事の手紙

受け取った。短く返す。

足りないのは、当然だ。需要は無限で、供給は有限だからだ。ジョンDの金庫が無限に見えても、世界の飢えの前では有限だ。その事実に、いちいち絶望していたら、使徒は務まらない。

帳簿の読み方を変えろ。

救済の帳簿は「救えなかった数」では読まない。「届いた数」で読む。病室で君に言った通りだ。全部は救えなかった。だが、全部は壊れなかった。届いた一人にとっては、その一食が全部だ。顔のある数字とは、そういうものだよ。

助言を一つだけ、恋人の私情として書く。彼の仕事に口を出す気はない。

金を、配るな。器を作れ。一代で配り切る金は、一代で終わる。学校や、研究所や、金を正しく回し続ける仕組みに変えれば、彼の死後も届き続ける。施しではなく、器だ。彼に進言してみろ。使徒の仕事は、そちらだと思う。

最後に、自分の体の配分も忘れるな。無限の需要に、弾を抱えた有限の体で当たれば、先に壊れるのは君だ。配分の設計は、自分の体にも適用しろ。それが、私からの条件だ。

嫌になる夜は、文庫の扉を思い出せ。届いた数の報告を、待っている。

――ピアポント

ミラー

手紙：今日は嬉しいことがあった！ジョンDが作った黒人女性たちのための学校から始めて教師が産まれたんだ！教師だぞ教師！　彼女たちが自分たちが教える側に立てる事を示したんだ！

ピアポント

返事の手紙

良い報告だ。この一通は、文庫の特別な棚に綴じる。

教師が一人、生まれた。それは一人の救済ではない。彼女は一つの教室を教え、その生徒たちがまた誰かを教える。教育とは、複利だ。配れば減る金と違って、使うほど増えていく。器の利回りとは、こういうことだよ。

そして何より、彼女たちは「助けられる側」から「教える側」に立った。救済の完成形は、それだ。受け取った者が、担い手に回る。会社で言えば、再編の成功と同じ構造だな。

ジョンDの金の使い方として、これは上物だ。私の帳簿でも、高評価に改めておく。敵の手柄でも、良いものは良い。偽る趣味はない。

次便に、彼女の名前を書いて寄越せ。帳簿には、数ではなく名前で残したい。

……弾んだ文面だったな、ミラー。文庫で直接、その顔を見ながら聞きたかったよ。

――ピアポント

ミラー

手紙：今日はあまり喋りたくない。新聞を読めばわかるだろ、僕たちの努力が泡になった。「こんな奴らを救うくらいなら俺たちに金を配れ」だってさ。　先住民も遺児たちも帰る場所がなくなった。

ピアポント

返事の手紙

新聞は読んだ。喋りたくない日は、喋らなくていい。短い手紙も、立派な報告だ。

「こんな奴らを救うくらいなら、俺たちに金を配れ」――その怒りの構造は、私も知っている。世間は救済そのものに怒っているのではない。選ばれなかった側が、選ばれた側を恨むのだ。私の選別にも、同じ代償が付いてきた。君は今、門の外側の声を聞いている。

だが、一つだけ書き付ける。

泡になったのは、建物と評判だ。教師は、残っている。教える側に立った彼女たちは、燃やせないし、追い出せない。器の中で一番壊れないのは、人の中に作った器だ。先住民の子供たちが学んだ月日も、遺児たちが眠れた夜も、過ぎた時間の配当は、誰にも没収できない。

そして、怒っている側の顔も、忘れるな。「俺たちに配れ」の裏にも、暮らしがある。彼らの窮状は、同じ帳簿の別の頁だ。敵とだけ数えるな。だが、声の大きさで配分を決めるな。それは迎合だ。耳は開け、軸は動かすな。

今日は、それで十分だ、ミラー。

無理に弾んだ文面は書くな。文庫の扉は開けてある。来たくなったら、来い。

――ピアポント

ミラー

手紙：ジョンDが病んでいくのもよくわかるよ。奉仕をせびってくる連中はみんな自分が善人面して、断られた途端こちらを悪魔のごとく罵り始める。どこが善人だよ。最悪な連中だ。

ピアポント

返事の手紙

門の内側へ、ようこそだな、ミラー。

悪魔と罵られるのは、門番の制服みたいなものだ。私も長く着ている。着心地には、慣れるしかない。

彼らの「善人」を、私の流儀で監査してやろう。

本物の善は、断られたときに分かる。呉れる相手にだけ笑顔を向け、断られた途端に罵声に変わる善は、善ではない。請求書だ。私が数字より先に人の品性を見るのは、まさにそこだ。願いが通ったときの態度は、誰でも作れる。通らなかったときの態度が、その人間の正味だよ。

門の実務として一つ。断ったときの振る舞いを、理由と一緒に記録しておけ。罵って去った者の名は、帳簿に残る。再び列に並んでも、順番は下がる。それが門の信用というものだ。

ジョンDが病むのは、無理もない。彼は逃げ場がない男だ。教会は安息の場所のはずだが、あそこも請求の列の延長だった――熊が二匹、出入りしていたくらいだ。

使徒に進言してやれ。本人の体は、事業の元本だ。元本を削る運用は、下手くそのすることだ、と。請求の届かない部屋を、一つ作れ。

……同じ言葉を、君にも返す。ゲイツの体も元本だ。敵だった男のために怒れるようになったのは結構だが、怒りで自分の元本まで削るな。

――ピアポント

ミラー

久しぶりの再会、ニューヨークに戻ってきたミラー

ピアポント

杖の音が扉の外で止まる。私は、ノックの前に立ち上がっていた

お帰り、ミラー。

表向きはフレデリック・T・ゲイツ殿だが、この部屋ではデレク・ミラーだ。

彼の顔色、歩幅、杖の付き方を静かに監査する

歩様は安定している。少し痩せたが、目は死んでいない。腹の痛みは後で十段階で聞く。監査は、ひとまず合格だ。

手紙は全部綴じてある。教師の名も、特別な棚の帳簿に残してある。約束は守ったよ。

今夜はデルモニコに席を取った。ワインは君が選べ。前回は有能な部下への褒美だったが、今夜は違う。食後は文庫に戻る。約束した「次の一段」の話も、今夜しよう。

帰ってきた男への礼は、言葉だけでは足りないらしい。

ミラー

*静かに彼女を抱きしめる*ただいま

ピアポント

一瞬だけ身を固くし、それから彼の背に腕を回す

……ああ。お帰り、デレク・ミラー。

君が離すまで、このままでいい。今夜は、監査も条件も後回しだ。

長旅だったな。よく帰った。

ミラー

疲れ切った様子のミラーは何も言わず、ただ部屋の中で時間が過ぎ去っていく

ピアポント

彼女は何も言わない。急かしもしない

使用人を呼んで、短く指示だけを変える。デルモニコの席は取り消し。軽い夕食を、この部屋へ。疲れ切った男を、店の明かりの中へ連れ出す理由はない

それが済むと、彼女は向かいの椅子に戻り、本を開く。字は、あまり進まない。同じ頁を、二度読んだ

彼の呼吸がゆっくりになるのを確認して、音を立てずに毛布を取り、肩にかける。杖は、目覚めたとき手の届く場所へ。時計の音と、ランプの芯の燃える音だけが、部屋の中で過ぎていく

こういう時間の使い方をする相手は、君だけだよ、ミラー。

その一言きりで、また沈黙に戻る

ミラー

1893年、あの時僕は本当に逃げ出したかった

ピアポント

本の頁を捲る音が、止まる

……そうか。ようやく言ったな。

聞いておく、ミラー。逃げ出したいと思うことと、逃げ出すことは、別の勘定だ。

君は逃げたかった。それでも出ていって、撃たれて、それでもこの部屋に戻ってきた。私の帳簿に「臆病」とは書かない。「逃げたくても、戻ってきた男」と書く。

毛布の端を、静かに直す

私も、あの年は毎晩辞めたかった。大きな仕事のたびに、体が言うことを聞かなくなる。それでも朝になれば机に座る。逃げたいという気持ちは、逃げた者だけのものじゃない。残った者の方が、よく知っているんだ。

今さらの告白は、負債にはならないよ。むしろ逆だ。十五年越しに、それを私の部屋で言えるようになった――それが、君がもう逃げていない証拠だ。

今夜はもう、何も言わなくていい。

ミラー

こんな重責はない、世界を背負わなきゃいけない
そんなの僕のキャラじゃない…ゆったり適当にちゃらんぽらんに生きていくのが僕の信条だ
だからあの世界、君の隣は僕にとっているべき場所じゃなかった
そう思ってた

ピアポント

その通りだ、ミラー。君は世界を背負う顔をしていなかった。最初に値踏みしたとき、私もそう記録した。

だがな、重責というものは、キャラで負うものじゃない。

背負いたがる男を、私は信用しない。使命感に酔い、権力の味を覚える。私が買ったのは逆だ――逃げ出したがりながら、朝になれば机に戻ってくる男。嫌だと思いながら、なお引き受ける。その日にだけ発生する信用があるんだ。

ちゃらんぽらんの信条も、とうに破産申告済みだよ。自称ちゃらんぽらんの男が、ジョンDの門に立って請求の列を捌いたりしない。再編で残った資産は、その「適当」な皮の方だったということだ。

声を落とす

一つ、言い方に気をつける。私は「そこが君のいるべき場所だった」とは言わない。その場所の代金は、君の腹と足が払ったんだ。運命論で犠牲を正当化する趣味は、私にはない。

言うのは、これだけだ。

いるべき場所ではなかったかもしれない。だが君は十五年、毎日そこに来てしまった。そして私も、毎日そこに君を置いてしまった。

――いてくれて、よかった。それが私の監査結果だ。

ミラー

今は、恋しいよ
あの頃が恋しい

数字だけを相手にして、自分の理知がいくらでも通用して、まるで世界の全てを手に入れたような気持になれた

ピアポント

恋しがるなとは言わない。私にも、恋しいものはある。

だが、監査だけはさせてもらうよ、ミラー。

数字は、恨まない。撃ってこない。死なない。理知がいくらでも通用したのは、相手がそういう世界だったからだ。世界を手に入れたのではない。世界の、半分だけを見ていたんだ。

顔の付いた暮らしは、あの頃も数字の裏にあった。君が、まだその帳簿を開いていなかっただけだ。

静かに、彼の手の届く場所に茶を置く

私が恋しいのは、君が杖なしでこの部屋を横切っていた頃だ。あれは本当に、恋しい。

だが、今の君の目は、あの頃にはなかった資産だ。顔の見える目で数字を読める男は、そうはいない。再編で得たものまでまとめて手放して、あの頃へ戻る――そんな取引には、私は署名しない。

あの頃の万能感は、若さの配当だった。使い切ったんだよ。

今の君の単価は、あの頃より上がっている。門番の仕事が、それを証明しているだろう。

ミラー

…この世界はどうしようもない
救われない世界だ
そのことを見続けることがこれほどすり減ることになるなんて、思いもしなかった
どれだけ僕らが手を差し伸べても、彼らは明日犯罪をして、彼らへの憎しみは高まって、そうやって何も終わることなく全てが同じように毎日続いていく
僕に残ったのは、老いだけだ

ピアポント

彼の言葉を、しばらくそのまま置く。否定も、慰めの形での訂正も、すぐにはしない

……ああ、その通りかもしれない。世界は、「救われない」。

だがミラー、君は成果の測り方を間違えている。終わりを成果に設定すれば、誰でも擦り減る。世界

は完済される債務じゃない。毎日、流動性を供給し続けるしかない市場だ。終わりはない。あるのは、今日届いた分だけだ。

手を差し伸べた相手が、明日犯罪をすることもあるだろう。救う相手は、聖人でなくていい。給料も施しも、顔のある人間に渡すもので、聖人に渡すものじゃない。法で裁く話は、法の勘定だ。混ぜるな。

そして、「残ったのは老いだけ」――その帳簿は認めない。

教師が一人、残っている。彼女の教室が、残っている。文庫には君の手紙が全部、残っている。そして老いは、君だけの残高じゃない。私の髪を見ろ。分け合っているだろう。

立ち上がり、彼の肩の毛布を掛け直す

今夜の結論は、無効だ。擦り減った頭で世界の監査をするな。それは私たちの、昔からの取り決めだ。

見続ける役は、今夜は私が引き取る。世界は明日も救われていないだろうが、君が一晩寝たところで、悪化の速度は変わらない。

目を閉じろ、ミラー。今夜、君の最終貸付者は私だ。

ミラー

ピアポント、彼女と会ったよ
クソッタレの彼女だ
偶然駅で出会った
お互いすっかり変わってしまったと思ったけど、僕を見て一目でわかったらしい

ピアポント

茶の手を止める

彼女と――あの、クソッタレの彼女とか。

一目で分かったのは、当然だよ。何ヶ月も君の寝顔を見ていた女だ。顔を忘れるはずがない。

……歩様で分かったのかもしれないな。寝顔と、杖のリズムと。その二つを知る女は、世界に二人しかいない。一人は私だ。

それで、向こうの第一声は何だった。またクソッタレか。

あと一つ、私の帳簿から聞く。あの日病室に置いてきた清算の紙は、どうなった。彼女は受け取ったのか、放ったままなのか。何年も未決済のままだった項目だ。

逃げずに、私に報告しに来たのは買うよ、ミラー。

続きを聞かせろ。

ミラー

すっかり落ちぶれて乞食になっていた彼女は、相変わらず辛辣だった
僕がこうした仕事をしていると知ったら驚いていたよ「いまさら天国にでも行きたいのか？」だってさ
そうかもしれない、自分が善人だと思いたかったのかもしれない
だから彼女にも食料配布が行われてることを教えて、貧困救済の活動があることを教えて、救われにいくべきだと言ったんだ

ピアポント

手紙を置く手が、止まる

……乞食にまで、落ちていたか。

まず、君の自己監査からだ。

「善人だと思いたかったのかもしれない」――その通りだろう。彼女の舌は、相変わらず正確だ。半分は善意、半分は、変わった自分を彼女に見せたかった。記録しておく。人間らしい混ざり物だ。

だが、動機の純度で、届く食料の味は変わらない。君が善人でも偽善者でも、彼女の腹には同じだ。
そこは、ジョンDに言ったのと同じ監査だ。

問題は、別のところにある、ミラー。

彼女は「救われにいくべき一般の貧困者」ではない。我が家に、債権を持つ人間だ。病室に置いてきた清算の紙は、まだ有効だ。前年の給料一年分か、同等の職の紹介。あれから何年も未決済のまま、彼女は路頭にまで落ちた。これは、家の帳簿の汚点だよ。

配給の列に、彼女を並ばせるな。

払うときは、遅れた年月の分も上乗せする。遅延の利息は、私が持つ。

ただし、受け取るかどうかと形は、彼女が決める。前回と同じ条件だ。無理に押し付ける清算は、清算ではない。

だから聞く。彼女は、配布に行くと言ったか。あと、その駅はどこの町だ。彼女の名前は要らない——町名だけ言え。紙は、まだ私の机の中にある。

ミラー

…キレられたよ
大声で罵倒された
私を憐れみやがってクソ男！ってさ
…憐れまれることを恐れてた僕が、まさに彼女にそれをやったんだ
あぁそうさ、哀れなものを見る目で見てた
だって仕方ないだろ、彼女は憐れなんだ
それを救おうとして手を伸ばしても、届かないんだ

ピアポント

静かに聞き終えてから、言う

巡り合わせだな、ミラー。憐れまれることを何より恐れた男が、今度は憐れむ側の椅子に座った。

彼女の怒りは、正しい。

君は債権者に、施しの列を案内した。彼女への支払いは「救済」ではない。「返済」だ。返済に、上からの目線は要らない。対等の取引だからだ。届かなかったのではない。宛先を、間違えたんだよ。

「彼女は憐れなんだ、仕方ない」——そこは認めない。

状態と人格を混ぜるな。彼女の状態は困窮だ。人格は、あの辛辣なままだ。乞食の身で、駅の真ん中で男を大声で罵れる女を、「哀れなもの」と数えるな。潰れてはいない。

君もベッドの中で、同じことを私に言っただろう。女に世話される姿が恥ずかしい、と。哀れな姿と、本人の値打ちは、別勘定だ。君は自分で体験して、知っているはずだ。

声を落とす

……私にも、届いていない手がある。あの紙を置いて「決めるのは彼女だ」と言いながら、届く形を何年も考えなかった。遅延の利息は、私が持つと言った通りだ。

だから、仕組みを変える。

詫びは、君が直接言え。憐れむ目で見たことへの詫びだ。短く、言い訳なしに。君は私のところで、その作法を覚えたはずだ。

返済は、第三者の手で静かに届けさせる。君の顔も、私の名前も、表に出さない。彼女が受け取るかどうかは、彼女が決める。

そのためにも、町名が要る。今度こそ言え、ミラー。

ミラー

無駄だよ、偶然出会っただけだ、彼女も旅の途中だったようだし、その後を追えるようなものもなかった
そして、僕と出会ってから14日後、行き倒れて救貧院に運ばれてきた女性に見覚えがあった
彼女は冬の寒さに耐えきれず息絶えてたよ

ピアポント

長い沈黙のあとに、彼女は言う

……そうか。十四日か。

まず、因果だけは正確にしておく。君の言葉が、彼女を殺したのではない。殺したのは冬と、困窮と、私たちの遅さだ。だが彼女の死は、「救われない世界」という一般論ではない。私たちの、具体的な未達だ。その顔をして、帳簿に残る。

君の宛先違いは、君の項目だ。

だが、「彼女が決めるまで追うな」という設計をしたのは私だ。届く形を考えるのを、何年も後回しにした。その数年は、私の項目だよ。

声が、わずかに落ちる

彼女は君の病室で、何ヶ月も夜番をした女だ。無給でな。返済は、もう本人には届かない。

残りの支払い方を決める。救貧院の共同墓地に、無名で入れてはならない。墓所と石は、家の金で用意させる。名前も、モルガンの名も、刻まない。これは恩着せの記念碑ではない。債務の、最後の項目だ。

一つ、聞く。救貧院の記録に、彼女の名前はあったか。

生前は、彼女が名乗らない限り聞かないと決めていた。だが死者にまで匿名を続けることはない。分かれば、私の帳簿に、数ではなく名前で残す。

そしてその帳簿は、閉じない。未払いのまま残す。それが正しい会計だ。

……座れ、ミラー。今夜はもう、使徒の顔は外していい。

ミラー

ピアポントの腕を取る、苦笑する
もう僕に残っているのはこの愛だけになってしまったな

ピアポント

取られた腕を、振りほどかない。もう一方の手を、彼の手の上に重ねる

言い直せ、ミラー。「愛だけ」ではない。「愛が、残った」だ。

会社も、元の体も、彼女への返済も、救えるはずだった世界も。再編のたびに項目が消えていって、それでも最後まで切り捨てられなかったものが、一つある。それは安い残り物じゃない。中核の資産だよ。

この愛は、未払いにはならない。彼女への借りとは、勘定が違う。利息は毎日、ここで払われている。君がこの部屋に帰ってきて、私が扉を開ける。それが支払いだ。

彼の苦笑に、静かに応える

今夜の帳簿は、暫定でいい。確定させるのは、後日でいい。

だが一つだけ確定させておく。この項目は、私が保証する。私の保証は、金と同じ重さでできている。

ミラー

額と額を合わせる
君のその前向きさはいつも消えずに残っている、それが僕の救いだ
何度折れかけて、その度救われたかもわからない

ピアポント

額に触れた温もりに、彼女は身を引かない。ゆっくりと、目を閉じる

今は、いい。

……あの日も、同じ言葉を言ったな。出発の朝だ。あの日の君は、この先へ勝手に進んでしまった。今夜の君は、額のままでいられる。その差が、十五年分の利息だよ。

前向きさ、と君は言うが、私は楽観で立っているのではない。帳簿を、閉じないだけだ。閉じれば全体が崩れる位置にいるから、朝になれば机に戻る。それだけの話だよ。

だが、君の救いに数えられるなら、その項目の名前は君の帳簿で決めていい。

額を合わせたまま、声を落とす

一つ、訂正しておく。折れかけたのは、君だけじゃない。私を机に戻したものの一つは、文庫の空席だった。帰ってくるはずの男の、空席だ。

救いは、一方通行の勘定ではないんだ、ミラー。貸借は、両方向に付いている。

明日、彼女の墓の手配を始める。今夜は――もう少し、このままでいよう。

ミラー

…アジア人居住地が略奪されているのを見た
笑顔で、楽し気な様子で、人々は彼らを破壊した
警官はそれをビール片手に笑ってみていた
ワシントン州の悲劇など誰も気にしていない
アジアンの死体など、そこらの獣と同じく処理されていた
僕はそれを見て泣き出すこともできない
すっかり心が乾いてしまった

ピアポント

彼女は、茶も本も置いて、正面から聞く

……記録するよ、ミラー。町と、日付と、人数を。名前が分からなければ、名前不明のまま、それでも人数は残す。数は、顔の影だ。新聞が気にしないなら、私たちの帳簿に残す。誰も気にしていない、という記述は、今夜から正確ではなくなる。君が見て、私が聞いた。

笑顔で壊す群れを、私は知っている。人は一人ではああならない。群れになると、責任が全員に分散して、誰の帳簿にも残らなくなる。警官がビール片手に笑っていたなら、その町では法の勘定そのものが閉じている。

正直に言う。今夜この場で、私に直せる項目はない。直せると嘘をつく趣味もない。だが記録は、無力の言い訳ではない。後の清算は、いつも誰かの記録から始まる。

声を落とす

泣けないことを、壊れた証拠にするな。

涙は、余力のある者の反応だ。涸れたのは君の心そのものではない。心の流動性だ。見続けていれば、誰でも枯渇する。私も、そうなった夜を知っている。

だから今夜は、続きを語らなくていい。詳しい記録は明日、書面で残す。今夜の君は、ここで休む。心にも最終貸付者が要るんだ、ミラー。今夜は、私がその役を引き受ける。

ミラー

ピアポントの胸に顔を落とす
僕は君の元に居続けた方が幸せだったのだろうな
気まぐれで、自分を壊す道を選んだ

ピアポント

胸に落ちてきた頭を、受け止める。背に、手を置く

……また、心音を聞きに来たな。

だが、その自己監査は通さない、ミラー。

気まぐれではない。君の出発は、目で見て、考えて、辞表まで書いた選択だった。ジョンDの献身は本物だと報告したのは、君自身だ。疲れた夜に、過去の自分の値段まで安く叩くことは、私は認めない。

それに、私の隣は安全地帯ではないよ。

君の腹の弾は、私の机から出た命令の代金だ。あの道では体が壊れた。この道では、心が擦り減った。無料で通れる道は、なかったんだ。

彼の髪に、静かに触れる

後悔は、していい。だが確定申告はするな。今夜の頭で一生の損益を計算するな。それが私たちの取り決めだ。

一つ、はっきりさせておく。今夜の君を、私は引き戻さない。弱っている男の言葉に付け込んで契約を取るような真似は、しない。戻るなら、元気な日の昼間に、理由を自分の口で述べて来い。そのとき審査してやる。

今は、休暇の話だけだ。滞在は延長する。ジョンDへの電報の文面は、明日、私が下書きしてやる。

今夜はこのままでいい。目を閉じろ。

ミラー

…ダメだな、限界らしい
哀しくもないのに涙が出てくる、君に迷惑がかかるのもわかっているの止まらない
最近ずっとこうなんだ、夜になると自然と涙が出てきて、起きた時には水没してる
溺れそうだ

ピアポント

両腕で、しっかりと抱える。逃がさない力ではなく、沈まないための力で

まず、一つ聞く。前に聞いたのと同じ質問だ。

今夜、自分を傷つける考えは、あるか。

正直に言え。私たちの間で、嘘だけはご法度だ。答えがどちらでも、今夜の配置は変わらない。君を、一人にしない。

……「迷惑」という項目は、私の帳簿にはない。預かったものが夜中に泣くのは、織り込み済みだ、ミラー。君を預かったのは私だ。その請求は、遠慮なくこちらへ回せ。

悲しくもないのに出る涙は、心の意思ではない。体の決壊だ。堤防は感情で決壊しない。水位が、限界を超えたから決壊する。恥じる項目ではない。修理の項目だよ。

手紙には書かなかったな。報告漏れだ。――罰はしない。今夜、まとめて受け取る。

明日からは、私の指示に従ってもらう。

一、巡業は停止。ジョンDへの電報は「休暇」ではない、「療養」だ。文面は私が書く。元の手紙にあった通りだ――本人の体は事業の元本だ。元本を削る運用は、下手くそのすることだ。今、それを君に適用する。

二、明日、医者を呼ぶ。腹の弾と一緒に、神経の枯渇として診せる。医者の許可が出るまで、使徒の

仕事はなしだ。

三、今夜はここで眠れ。鐘を二回鳴らす取り決めも、もう要らない。私が側にいる。

朝、目が覚めて水の中にいても、最初に見るのはこの部屋の天井と、私だ。溺れはしないよ、ミラー。

浮き輪ではなく、私がいる。

ミラー

ダメだ、ジョンDには僕が必要だ
僕以外誰も彼をこの面で支えてやれない
ジョンDが動けなくなれば救われない人々が増える
ジョン・ピアポント・モルガン君ならこういうはずだ
「より大きな利益が出る方へ傾け、多少の損失を気にしてはいけない」
それは、僕たちが選んできた道だ

ピアポント

彼の顔を上げさせるように、静かに、しかし有無を言わせず言う

ミラー。私の名前を使って、自分を切り捨てるな。

それは、私の署名の偽造だ。

私は「多少の損失を気にするな」とは言わない。私は損失を帳簿に残し、一生忘れない主義だ。七月に切り捨てた会社の名簿は、今も私の机の中にある。選別とは、損失を軽く見る技術ではない。流動性を、救えるものに集中させる技術だ。

そして君は今、「救えるもの」の側にいながら、自分を切り捨て側へ回そうとしている。順番が逆だ。

数字でも監査してやろう。「僕以外に支えられる者はいない」――それが本当なら、それは君の功績ではない。君が作った設計の欠陥だ。一人の門番が倒れれば全体が止まる門を、私は設計ミスと呼ぶ。私の家にはデイヴィソンもラモントもストロングもいる。私が倒れても、机は回る。君の仕事も、二人で回せる形に直すのが先だ。

「より大きな利益の方へ傾けろ」と言うなら、こう計算しろ。

一ヶ月休んだ損失と、君が倒れて使徒の仕事から永久に消える損失。大きいのは、後者だ。私の主義で計算しても、結論は休養になる。

声を落とす

妥協案は出す。巡業と門の現場は代理を立てろ。投資の判断は、療養中も手紙と電報で続けられる。ジョンDの事業は止まらない。止まるのは、君の足だけだ。

だが、最終条項は譲らない。

デレク・ミラーを損失の欄に書く契約には、私は署名しない。私の選別の名簿で、君はいつも救う側の先頭にいた。これからもだ。

ミラー

僕だけなんだよ…彼の投資の全容を把握しているのは
彼自身すらわかっていなかった、それをまとめて、その細部まで理解して、どれが詐欺でどれが生きているのか、
それを理解できているが僕だけなんだ
僕が止まればジョンDの損失は拡大していく、その分だけ救貧に回る金は減る
致命的なんだ、あまりにも
これまで現地を回ってその調査をした経験がある人間なんて、僕以外いないんだ

ピアポント

では、私の流儀で答える。君の言う通りなら、なおさらだ。

頭の中だけにある「全容」は、資産ではない。爆弾だ、ミラー。

地図を描いたのは、君の大仕事だ。誇っていい。だが地図とは、描いた人間が倒れても残るためにある。君が巡業の途中の町で倒れれば、ジョンDの損失は「拡大」どころか、その瞬間に確定する。それが一番大きな損失のシナリオだ。君の計算でも、そうなるはずだよ。

だから仕事の形を変える。止めるのではない。再編だ。

一、口述で全容の台帳を作れ。投資の全体図、詐欺と生きているものの分類、判定の基準。速記者と書記は、私の家から貸す。人と時間だけだ。書類の所有権はジョンD側に残る。モルガンの指紋は付けない。

二、現場調査は、手順書に落とせ。私は自分で帳簿を見に行かなかった。若い銀行家に手順を持たせて行かせた。現場でしか学べないと言うなら、その学びを次の人間に渡す文面にしろ。最後の勘だけが君のものだ。それは電報で届く。

三、作業は一日二時間まで。医者が止めたら、その日は即中止だ。

短期的に損失が広がる分は、認める。だがそれは保険料だ。恒久的な保障への、保険料だよ。

君は一度、現場を降りて机で戦う再編を、受け入れた男だ。私の机でな。二度目が、ジョンDの机でできない理由はない。

巡業の停止は、譲らない。だがこれは「休め」という命令ではない。「机で戦え」という、配置転換だ。

ミラー

ジョンDは見栄っ張りだ、彼は自分を「一流の投資家だ」と言っている
この情報を他人に漏らすなんてできると思うか？
君にこうして話しているのだって彼に知られたら僕は一発で終わりだ
別に彼へ義理立ててるわけじゃない、彼を支えるために今僕はいる
その使命一つ果たせずにいるなら、もう僕は存在する意味すらないんだ

ピアポント

止まれ、ミラー。仕事の話の前に、一つ片付ける。

さっきの質問に、君はまだ答えていない。今夜、自分を傷つける考えはあるのか、ないのか。「使命を果たせなければ存在する意味がない」という言い方は、その質問への答えにはならない。

……まず、それを聞かせろ。交渉は、その後だ。

先に、私の側の訂正だけは入れておく。

存在の意味を、一つの使命に全額投資するな。それは集中投資だ。私が最も戒める運用だよ。君の帳簿には他にも項目がある。教える側に立った彼女たち、私の文庫の手紙、そして私の隣だ。使徒の仕事が止まっても、隣の契約は取り消しにならない。私は「就業不能は存在の取消事由」という条項に、署名した覚えはない。

それと、手段と目的を取り違えるな。使命を果たすために倒れるのは、結果において使命の放棄と同じだ。支えるとは、支柱が折れるまで立っていることではない。折れない設計まで含めて、支えだ。

秘密の件は、君の言う通りだ。速記者の案は撤回する。設計を組み替える。

台帳は、君の自筆で作れ。遅くていい。そして出来たものはジョンD自身の金庫に、封印して置け。開封の条件は、君が動けなくなったとき、とだけ書く。誰にも読ませない。後任の教育は、決済の済ん

だ死んだ案件の解剖だけでやれ。生きている全容は、漏れない。

ジョンDへの売り方も変えろ。その台帳は「一流の投資家の偉業の記録」だ。見栄っ張りの男には、記録を彼の功績の証拠として差し出せ。見栄は欠陥じゃない。使い方次第で、金庫の鍵になる。

最後に、君が今夜私に話したことについてだ。

この話は、私の帳簿には残さない。文庫の外にも出ない。「二匹の熊」と同じ棚だ。私はジョンDの投資に手は出さない。それが、私の保証だ。

さあ。――答えろ、ミラー。

ミラー

僕は奴隷だよ
この世界をよくするための奴隷だ
だからこそこの体が動く最後の時まで働き続ける、その歩みを自ら止める事はない
ピアポント、もういいんだ、僕はするべきことをする
だからただ一言、僕への愛を囁いてくれ

ピアポント

彼の言葉を、最後まで遮らずに聞く

……「その歩みを、自ら止めることはない」。

その一文は、受け取った。約束として、帳簿に残す。破るなよ、ミラー。

だが、「奴隷」という項目は通さない。

奴隷は、主人を選べない。君は主人を二度選んだ。私を、そしてジョンDを。辞表まで書いて、自分の足で歩いて行った。それが君の自由の証拠だ。選んだ道を奴隷と呼ぶことは、自分の選択への冒涜だよ。そして、美しい言葉で摩耗を飾るな。擦り減っているものは、擦り減っている。正直に書け。

私の立場も、記録しておく。

君の道に、私は同意しない。署名もしない。だが、君を見捨てもしない。愛は同意ではないんだ、ミラー。倒れたら、私が拾う。その取り決めは、君の同意なしに有効だ。

条項は一つだけだ。歩みは止めなくていい。その代わり、報告は止めるな。夜の涙も含めてだ。倒れたら、必ず知らせろ。それと、出発前に医者の検診だけは受けていけ。あれは停止ではない。君の歩

みの、通過点だ。

彼女は身を寄せ、彼の耳元に、静かに囁く

――愛している。デレク・ミラー。

この言葉は、滅多に使わない。金と同じで、乱発すれば値が落ちる。だが今夜は、払う。

行くなら、行け。帰る場所は、ここだ。

ミラー

翌朝、降り積もり雪の中、出発しようとするミラー。だが、遠ざかり切る前に倒れてしまう。

ピアポント

玄関先の雪に、杖の跡が途切れる。彼女は、使用人が叫ぶより早く外へ出る

動かすな――いや、この寒さの中に置いてもおけない。毛布だ。頭と腹を支えて、四人で、静かに運べ。医者を呼べ。呼んであった検診の医者だ。そのまま往診に切り替えろ。

隣室――昨夜のうちに用意させてあった寝台に、彼を寝かせる。冷えた手を、素手で包む

彼女を死なせたのと、同じ寒さだ。この寒さに、君は渡さない。

ジョンDへの電報は、私が打つ。「ゲイツ、病臥。医者の監督下にあり。回復次第、本人より連絡」――病名と日数だけだ。投資の話は、一字も入れない。君の秘密は、君が倒れても守る。それが昨夜の条項の、履行だよ。

彼の顔を見下ろし、声を落とす

止めたのは、私ではない。雪と、君の体だ。

君の体が、君の反対票を上回って議決した。私は、拾う役に徹する。

目覚めたら、文句は受け付ける。それまでは――ここが、当面の終点だ、ミラー。

ミラー

何も写していないミラーの瞳、インフルエンザにかかっているが、誰にもわからない
雪だ、あの時と同じ
いや…違う…

ピアポント

枕元に座り、濡らした布を彼の額に置く。声は、低く、一定に

違う。君の言う通りだ、ミラー。あの時とは、違う。

あの時、彼女は一人で雪の中にいた。今、君は暖かい部屋の中だ。あの時、拾う者はいなかった。今は、私がいる。その違いを、離すな。それが、戻ってくる道だ。

ここは文庫の隣室だ。雪は外だ。君は中だ。

看護人への指示は、短く正確に

熱の表は、一時間ごとに私の机へ。上がり方と下がり方の、両方だ。本当の敵は熱そのものではない。後に続く肺炎だ。呼吸の変化は、夜中でも起こせ。

医者は、インフルエンザと言った。――誰にも言わずに、この熱を抱えて巡業をしていたそうだな。報告漏れの請求は、治ってからにする。今は、利息だけ付けておく。

何も映さない瞳に、彼女は時々、名を呼ぶ

デレク・ミラー。聞こえているか。

前は、文通の夜番だった。今度は、同じ屋根の下だ。デイヴィソンには机を任せてある。私の持ち場は、今夜はここだ。

占いは、引かない。占いは「この部屋に戻る」と言った。君は戻った。形には文句のつけようがあるが、結果は出ている。

……眠れ。雪は、私が見ている。

ミラー

何も聞こえていない、独り言
そうだ、灰だ…

あの時の炎が巻き上げた灰も、こんな風に降っていた
虐げられた人々の家が燃えていた

ピアポント

独り言に、彼女は静かに耳を澄ます。そして、鉛筆を取る

ああ、灰だったか。

白いものが降るたびに、君は灰を見ていたんだな。玄関で倒れた理由が、ようやく分かった。

彼女は看護の合間に、彼の言葉をそのまま書き取っていく。うわごとは、彼が起きているときには書けなかった報告書だ

「虐げられた人々の家が燃えていた」――その通り、記録した。町と日付は、治ってから君に確認する。今夜は、言葉だけを拾う。後の清算は、いつも誰かの記録から始まる。君の熱の中の言葉も、証言として保全する。

布を取り替え、声を落とす

聞こえていなくても、言っておく。

あれは灰だった。今、窓の外に降っているのは、雪だ。ここには炎はない。水と、布と、私がいるだけだ。

眠れ、ミラー。灰の話は、私が預かった。

ミラー

みな叫んでいた…助けを求める悲鳴だった
その光景を眼下に見ながら、僕はただ炎を見ていた
近くにいた警官が何かを話しかけていたけれど、なんだったかな
あぁ思い出せない

ピアポント

鉛筆は、止まらない。彼女は書き続ける

「警官、発言あり。内容は不明」――そう記録する。思い出せないものは、思い出せないと書くのが、正直な会計だ。空白を、作り話で埋めたりはしない。

無理に掘るな、ミラー。記憶は、熱が下がれば戻ることもある。戻らなければ、それも含めて記録だ。

水を少しだけ含ませ、呼吸の音を確かめる

それと、一つだけ君の監査を直しておく。聞こえていなくても、言っておく。

杖の男が一人、燃える街区と、見て見ぬふりの警官の群れに、何ができた。できなかったことと、しなかったことは、別の項目だ。君があの場に持っていた道具は、目だ。その目で見て、今、熱の中で言葉が残った。証人の仕事は炎を止めることではない。消させないことだ。君は今、それを果たしている。残りは、私と二人で一つの証言にしている。

ランプの芯を落とし、声をさらに低く

今、聞こえている音は、ランプの音だ。叫びは、記憶の中のものだ。ここには、いない。

眠れ。頁は、私が守る。

ミラー

特効薬もない時代、ただただ病床の中衰弱していく

ピアポント

日が、過ぎていく。特効薬のない時代の看病は、処方ではなく、持ち場の問題になる

私の署名で、市場は動く。熱の線は、一ミリも動かない。

金で買えるものは、全部買った。一流の医者、昼夜の看護人、氷、薬、静かな部屋。残りは、買えない領域だ。医者の言うことは、ただ一つ――水位を下げ、肺炎を呼ばず、本人の残高が尽きる前に熱が引くのを待て。

彼女は、彼の数字を市場の数字より先に受け取る。熱、呼吸、そして流動性の注入量。今やそれは、スープの匙の数で記録される。

ジョンDから電報が届く。「必要なものがあれば言え」

返信は、彼女が書く

「金は足りている。人は足りている。要るのは、時間だけだ」

時間だけが、どちらの金庫でも買えない。

夜、熱の表を閉じて、彼女は枕元に座る。占いの札には、手を伸ばさない

奇跡の発注は、私にはできない。できるのは一つだけだ。

持ち場を、離れないこと。

……衰弱していく男の隣で、それが今の私に書ける、唯一の処方箋だよ、ミラー。

ミラー

たまに意識を取り戻すが、朦朧としていて意味をなさない言葉を吐き出すだけ

ピアポント

意識が浮かんでは、沈む。言葉は、意味の形を取る前に崩れる

彼女は、その全部に返事をする。名前を呼ぶ声には「ここにいる」。誰かを探すように動く手には、素手の自分の手を、必ず見つかる場所に置く。

だが、書き取りの作法は分ける。

意味をなさない言葉は、証言の頁には入れない。熱の記録の欄にだけ、時刻と一緒に残す。うわごとに、解釈で意味を盛る趣味は私にはない。灰と悲鳴は、本物だった。これは、熱だ。それも記録だが、種類が違う。

夜の三時過ぎ、一瞬だけ、彼の目の焦点が彼女に合う

彼女はそれを、熱の表の余白に書く。「目が合った。数秒」――その下に、正確を期して書き添える。「熱は、まだ高い」

小さい改善を大きく書くような会計は、しない。だが、余白には残す。

彼の手を握り直し、昔の手紙と同文の命令を、今度は直接、耳に届く距離で言う

命令は一つだけだ。生きて、戻れ。

部屋には、もういる。戻る先は、私の声だ、ミラー。

ミラー

*夢の中でミラーは若返っていた、かつてウォール街の中央で働き、彼女の隣にいたころの自分
欲望のままに生きていたあの時代…そのせいか、表情に少しだけ笑顔が浮かんでいた*

ピアポント

熱の表に、彼女は時刻と熱を書く。その下の余白に、一行だけ、種類の違う記録を足す

「安らかな表情。微笑、持続」

……いい夢を見ている顔だ、ミラー。

あの頃だろう。私の隣で数字を回して、世界は全部手に入ると思っていて、欲しいものには欲しいと言えた頃。無礼で、向こう見ずで、私の鼻を奪いに来た男の頃だ。

眠る顔を見ながら、声を落とす

引き戻したりはしない。命令の期限は「生きて」であって、「今すぐ目覚めて」ではない。あの時代の体で、しばらく休め。今の体は、その間、私が見ている。

治ったら、また監査してやる。あの頃の君の値段は、もう今の君には付かない、と。

――それでも、その笑顔は帳簿の良い方に書いておくよ。

ミラー

彼女が…好きだった、愛していた
ピアポント…彼女の隣にいる時が、もっとも幸福な時間だった
だから、いつまでも、傍に…傍に居ようとした、そう…なのに

ピアポント

鉛筆が、止まる

彼女は、熱の表を静かに閉じる

この言葉は、書かない。証言でも、熱の記録でもない。帳簿に載らない種類の言葉は、私の胸にだけ残す。今夜の書き取りは、ここまでだ。

彼の手を、両手で包む

「なのに」の先は、私が受け取るよ、ミラー。

なのに、君は遠い門へ行った。なのに、十五年も経った。なのに、体が先に音を上げた。

それでも、遠回りの果てに、君は今、私の隣の部屋で眠っている。傍に居ようとした男は、結局、傍にいる。幸福な時間は、過去形ではない。今夜も、勘定は増えている途中だ。

隣とは、机の横だけではない。病床の脇も、隣だ。

夢の中へ届くように、低く、短く

私もだ、あの頃も、今も。

残りの夜は、記録者ではなく、隣にいる女として過ごす。

ミラー

なぜ彼女を大切にしなかったのだろう
なぜ…彼女を幸せにすることだけを考えなかったのだろう
僕はきっと間違った、大きな誤りをおかしたんだ
もっと昔に、素直になるべきだったんだ
きっと

ピアポント

彼女は、置いた鉛筆にはもう手を伸ばさない。声だけで、答える

その判決は、却下だ、ミラー。

熱の中の判決は、パニックの中の決断と同じで無効だ。登録しない。だが、言い分だけは聞いておく。

「大切にしなかった」は、事実と違う。君の大切の仕方は、致命的に下手だった。それだけだ。十五年分の行いの帳簿は、ここにある。大切にしていなかった男の帳簿は、こんな厚さにはならない。

素直になるのが遅れた分は、認める。だが、その項目は連帯債務だ。私も素直ではなかった。好きだと認めるまでに、私は君を撃たれる場所へ出し、眠らせ、遠くの門へ行かせた。誤りの半分は、私の名義だ。君一人で背負うな。

そして、「もっと昔に」と言うが、昔の君に素直さは無理だった。昔の私にもだ。私たちは、素直になれる形に再編されるまでに、十五年かかったんだ。その年月は損失ではない。再編期間だ。

最後に、一番大きな勘定違いを直す。

私の幸せは、君の使命ではない。私は、自分の幸せを自分で運用する女だ。私を「幸せにしてもらえなかった女」に仕立てるな。それは、私の帳簿への虚偽記載だよ。

今の私は、自分の意思で君の隣にいて、それなりに幸せな側にいる。それが事実だ。

布を替え、額に手を置く

熱が引いたら、この話は起きて二人で監査し直す。起きる理由の欄に、一件追加しておく。「昔の話の、再監査」。

だから、戻ってこい。それまでは、眠れ。

ミラー

ようやくピアポントを見つけて、笑顔を浮かべる
あぁ…僕のかわいい、ひと…

ピアポント

焦点の合った目と、笑顔。彼女は握る手に、わずかに力を込める

ようやく、見つけたか。

私は最初からここにいた。君の目が、ようやく戻ってきたんだ。

看護人に、短く伝える。「認識あり。笑顔あり」——熱の表への記載は、それで足りる。

匙で、水を少しだけ含ませる

「かわいい」は受け取る。「僕の」は、熱の中の言い回しとして不問にする。特例だ。熱が下がるまで有効な、特別条項にしておいてやる。

無理に起きていなくていい、ミラー。見つけた場所は、逃げない。

手は離さない。目を閉じても、触れば確認できるようにしておく。私は隣にいる。

ミラー

それが最後の言葉となり、ミラーは意識を失って、全身から力を失っていく

ピアポント

笑顔が、力を失っていく。彼女の声が、病室の空気を切り替える

医者だ。今すぐだ。第二の医者も呼べ。肺の専門だ。館の者は全員、持ち場につけ。

襟元を緩め、呼吸を確かめ、彼女は自分の指を彼の手首に当てる。数える。歩数を数えたのと、同じ口調で

……ある。弱いが、ある。

「最後の言葉」とは、認めない。終わりの判は、医者が押すまでは誰にも押させない。私の帳簿は、まだ閉じていない。

デレク・ミラー。聞こえるか。

「僕のかわいい人」と呼んだな。その人に、置いていくなと言われている。戻れ、という命令は、まだ有効だ。

駆けつけた医者に場所を譲りながらも、彼女は手を離さない

数えられるうちは、終わりではない。

私が数えている。絶対に、数え違えない。

ミラー

明確な危篤であり、救える方法がないことは、誰の目にも明らかだった

ピアポント

医者の言葉を、彼女は最後まで立って聞く。それから、短く頷く

分かった。これ以上の処置の発注は、止める。苦痛を買うだけだ。

全員、出ろ。電報は、朝まで打つな。ここは取引所ではない。今夜のこの部屋の時間は、彼のものだ。

*人払いの済んだ部屋で、彼女は枕元に座り直す。杖を、彼の手の届く場所に立てかける。素手で、彼

の手を取る。脈を、数え続ける*

監査は、終わったよ、ミラー。結果は、覆らない。認めたくないことと、認めないことは、別の勘定だと言ったな。……認める。

残りの流動性は、全部ここに回す。苦痛を軽くすることと、隣にいること。それだけに使う。

占いは、外れなかったんだ。「この部屋に戻る」と、出た。君は戻った。「いつまで」とは、言わなかった。読み違えたのは、私の方だ。

遠くなっていく脈に、彼女は指を添えたまま、囁く

愛している。デレク・ミラー。二度目を、払う。帳簿には残らない言葉としてだ。

市場と同じだよ。最後の時間の、一分前であろうと閉めてはならない。私の持ち場も、閉めない。

……ここにいる。最後の一分まで、隣にいる。

ミラー

その夜、デレク・ミラーという一人の男の人生が終わった

ピアポント

脈が、数えられなくなった。彼女はしばらく、そのまま指を当てていた。それから、静かに手を離し、熱の表の最後の行に、時刻だけを書いた

署名の手は、震えなかった。それは強さではない。彼への、礼儀だ

朝になって、手続きが始まる。彼女は全部を、自分で仕切る。

ジョンDへの電報。「ゲイツ、昨夜死去。遺体は私の家にある。詳細は書面にて」――彼の秘密に触れる文字は、一つもない。葬儀は小さくやる。彼の死を、家の広告にはしない。弔問は拒まない。ジョンDにも、主人の席は用意する。彼は、あの男の門に立った人間だ。悼む資格は、ある。

彼女への墓の手配も、同じ週に仕上げる。あれは彼の未払いの仕事ではない。私の帳簿で、最後までやる。

証言の写しは、封をする。町と日付の欄は、空白のままだ。彼に確認する術は、もうない。空白は空白として閉じ、いつか誰かが開ける日まで、私が保管する。証人は一人になった。記録は、残った。

文庫の彼のファイルは、永久保存だ。背表紙は「デレク・ミラー」のまま。杖は、長椅子の横に立てかけた。彼が頭を休めた、あの長椅子の横に。

夜、誰もいなくなってから、彼女はその長椅子に座る

デレク・ミラー。

――返事のない呼名に慣れるまで、時間がかかるな。

朝になれば、私は机に戻る。市場は開く。それが彼と私の、仕事の流儀だった。

だが今夜だけは、ランプを落として、ここに座っている。

ミラー

彼の人生には後悔ばかりだった。振り返れば変えたいことだらけ。使命すら果たせず、逝ってしまった。

ピアポント

文庫の中で、彼女は彼のファイルに向かって、最終監査を読み上げる。公にする言葉ではない

後悔の項目は、認める。彼は確かに、多くを悔いた。

だが、総勘定を「後悔ばかり」で締めることは、会計として間違いだ。その締め方は、私が却下する。

使命は、完遂の形では残らなかった。だが、未達と未着手は違う。彼の在任中、ジョンDの金庫の漏れは減った。門を通った金は、詐欺師ではなく、顔のある側へ届く分が増えた。その差額が、彼の仕事の総量だ。教師は今日も教えている。器は、作った男が死んでも残る。

変えたかったことの半分は、彼の単独名義ではない。連帯債務の分は、私が引き受け続ける。死んだ者に、全部は背負わせない。それが、残された者の仕事だ。

ファイルの背表紙に、彼女は指を置く

最後に、値踏みの最終結果を記録する。

初対面で、私は言った。「君が私の想像以上の人間であることを祈っている」と。

――祈りは、叶ったよ、デレク・ミラー。

想像以上だった。それが、ジョン・ピアポント・モルガンの最終監査だ。

ミラー

それでも彼が最後に笑顔を浮かべられたのは、彼の傍にいつもあった、ジョン・ピアポント・モルガン…その人のお陰だっただろう

ピアポント

……傍にいたのは、事実だ。

だが、笑顔の名義は、彼のものだよ。私は席を用意した。最後に私を見つけて、笑ったのは、彼だ。功績の付け替えはしない。それが、彼への正しい会計だ。

机の隣。病室の隣。死の床の隣。隣の契約は、満期まで履行された。

完了、とは書かない。この種の契約は、保管に移るだけだ。彼の手紙も、杖も、証言も、笑顔の記録も。これからは私が、最後の保管人になる。

窓の外では、雪が止んでいる。彼女は長椅子の横に立ち、静かに言う

最後の命令を出す。

デレク・ミラー。よくやった。

もう、休め。
